生物に對する時、各自の觀察があり、發見があり、また理解があります。そこに、子供達の自から本能が働き、自治の觀念が誘發されるのです。

かうして、子供達は、遊んでゐると見做さるべきであるが、この間に、彼等は、自然から多くを學びつゝあります。智識の上に、感情の上に、この世界から探る經驗の集積をなしつゝあるのであつて、やがて成人として人格を形造るのに、どれ程これ等の經驗は、影響するか知れません。

將來、學校に於て、書物に就て系統的に學ぶことよりも、この子供の時代の、自然に親しんで自から感得した、生物に對する愛と智識こそ、情想を養ふに役立つものはないといへるのであります。それであるから、大人は、かゝる場合、子供の自由、自發に、たいていのことは放任すべきです。そして、彼等の自治的な世界を無視して、強制的に文字を教へたり、文章を作らしたりして、徒らに、早教育の弊に陷らしめぬことが肝腎です。

多くの有爲の人間が、資産家よりは、貧乏の家庭に、都會より、田舍に出るといふ

事實は何を語るでありませうか。いろ〳〵の教化機關が備はつてゐるために、子供等に、自發の精神と自治的習慣を與へなかつたがためではなからうと思はれます。

子供の詩と、藝術は、彼等の自由、自治の世界から、自然に發生するものです。

死と自由

一、黑い影

あちらには、二本の高い木が、脊伸をするやうに、雲切のした、晩方の青い空に聳えてゐました。さながら、兩方から、頭を寄せあつて、この靜かな、四邊の景色をながめて話でもしてゐるやうに見られたのです。

野原から、街の方へつゞいてゐる道は、白く乾いてゐる。この道を北へ歩いて行けば、賑かな町に出ました。そこには、いろ〳〵な形の建物があり、物を商ふ店があり、着飾つた人間が、撒きちらしたやうに、往來してゐたのです。そして、もつと、もつと、その町から北へ行けば、またさびしいこのやうな細い道となり、それを歩いて行けばついに海に達するのでありました。

もし、反對に、この白く乾いた道を、南へ、南へ、歩いて行つたなら、村がありま

した。村は、やがて、他の村へとつゞいてゐる。そこには、常盤木の森に圍まれて、農家があり、なかには、夕餉の仕度をして、煙の立つてゐるのもあり、また、子供が鷄といつしよになつて、地面を這ひまはつて遊んでゐたり、厩から牛が首を出して、秣に飽きて、眠さうな顏をしてゐたのもあります。

それ等は、この野原の中の一筋の道の上では、知られやう筈がないのでありますが先刻から、傍の石に腰を下してつくねんとしてゐる黑い影がありました。

二羽の鳶が、あの簪をさしたやうな、二本の高い木の頂きのあたりの空を、輪を描いて、飛んでゐたが、そのうちにだん〳〵日は暮れてきて、その姿が、見えなくなると、月が圓い顏をこのさびしい野原へ出しました。

月は、思ひがけなく、さがしてゐた、黑い影を見つけたので、

『あなたは、こんなところに、何を考へてゐるんですか?』と、聲をかけた。

女にしては、少し脊が高過ぎ、男にしては、あまり痩すぎてゐる黑い影は、はじめて、うつむいてゐる顏を上げました。すると、二つの眼は、氷のやうに、冷たく光つ

て、白い三枚の尖つた歯をうつろの口から露はしてゐる『死』でありました。
『私は、どこへ行つても、みんなから嫌はれてゐます。太陽も、星も、私には、厚意を持つてはくれません。咲いてゐる花も、吹いてゐる風も、私を見ると顔を反けます私は、それ程、嫌はれなければならないだらうか？　それを考へてゐたのです……』
と、答へた。
月は、黒い影を見つめつゝ、だん〳〵、高く上りました。
『あの陽氣な太陽が、あなたを嫌ふのに無理はありません。また、生命の宿る草や、木が嫌ふのにも不思議はない筈です。なぜなら、あなたの歩くところ、命のあるものはすべて凋れて、枯れて、しまふのでありませんか。この野原にしても、あなたの通つて來たところは、はつきりと足跡がついてゐます。しかし、私は、さうあなたが嫌いといふ譯ではありませんよ』
死は、自分の耳を疑ふやうに、ぢつと月を見つめました。
『お月さん、人は、あなたのことを無情といひます。それで私を好きなのですか』

『なにも、性質が似てゐるからでない、私は、かうして、廣い世界に存在する、ありとあらゆるものを見てゐます。鎖につながれて、それを斷ち切ることができなく、惱んでゐる者を、孤獨と寂寥に苦しめられて、死なうと思つて、自分で、命を絶つことができずにゐる者を、一日の休みなき勞働に、無理に從はされて、苦痛以外に生きてゐることの喜びを感じない者を、あなたは冷たい手で抱いて、救つてやる友達であるからです』
月が、かう言ふと死は、さもなつかしさうに見上げて、うつろの口を開いて答へた。
『お月さん、さう言つて下さるのは、あなたばかりです　あの、さびしい海の燈臺守のお爺さんを、靜かに眠らせてやつた時に、私は惡いことをしたとは思はなかつた。また、無期に處せられた男が、毎夜、苦しんでゐるのを見て、一思ひに心臓を刺してやつた、その時も、決して惡いことをしたと思はなかつたが、誰も、私を褒めてくれる者はなかつたのです。私は、いまさら、自分を、好かれやうとは思つてゐません』
『けれど、死か、自由かと、言つてゐる人間もあるのだから……。これから、ど

こへ行くのですか?』と、月は、たづねました。

『あちらの町へ行かうと思つてゐます』、死は、答へた。

月は、それぎり默つて、空へ上つてしまひました。死は、ぢつとして、いつまでも石の上に腰をかけてゐました。

ちやうど、あちらから、一人の男が、よぼ〳〵になつた馬を引いて來かゝつた。もはや役に立たなくなつたので今夜、屠殺場へ送られる途中なのです。死は、自分の手を煩はすまでもない、うなだれて前を通る、あはれな犧牲を見るとびつくりしました。

この馬は、將校の乘つた馬です。戰爭の時將校は、この馬に乘つて指揮してゐた。その時、死は靜かに忍び寄つて、將校の心臟を刺した。そして、將校の服裝を剝いで自分の身にまとつて、この馬に跨つて、先頭に立ち、村を襲い、町を攻擊しました。軍馬は、人間の屍の上を越えて行つた。砲車は建物を粉碎して進んだ。時には、若い女を裸體にして、長い髪の毛を暴れ狂ふ馬の尾に結んで、女が生きながら、悲鳴を上げるのを、往來を引ずつて行つた……あの時の馬だと死は思ひました。

死は、靜かに、石から立ち上ると、馬を引いて行く男の肩へ手を置いた。男は、たちまち一歩も先へは歩るけなくなつた程疲れを感じて、死が腰をかけてゐた、同じ石のところへ來て腰をかけた。そして、そのまゝうつむいて、眠つてしまつた。すると死は、音もなく、馬の脊に跨りました。無言で、町の方へ歩いて行きました。——町ではちやど戀が語られ、酒場は賑ひ、活動寫眞館は、客を呼んでゐた時分です。

二、土の炎

灰色の海から、押し寄せて來る波は、白い牙をむいて、岩を嚙み、崖に打つかつてゐました。

風は、ヒヨウ、ヒヨウと聲を立て、平原を吹いてゐる。この時、砂を破つて、頭を出した茅がありました。

『なんといふ怖しい景色なんだらう……』

芽は、小さくなつて、土蔭に隱れて、誰にも氣づかれないやうに、あたりを見廻してゐました。

雪と風の亂舞する世界へ出て、花を咲かうとすることは、この上もない、冒險だつたにちがひない。そして、自分がまつ先にその冒險をしなければならぬことは、考へれば、あまりに無謀だつたのです。

風は、古戰場を見廻るつもりで、横暴に平原の上を隈なく吹いて行きました。後には、病みほゝけたやうに、黄色な太陽の光りが、砂の上に光りを降らしてゐます。

『今日にしようか、明日にしようか?』

芽は、この世へ出るために思案してゐました。風が沖の方へ退いて、あたりが、穩かになつた僅かの隙を見て、芽は全く砂の外へ頭を出した。そして、眞赤な花を咲いたのであります。これを見た、太陽は、かすかな、叫びをあげ光りはすぐに、その赤い花瓣に吸ひ付きました。

『私は、病んではゐないんですよ。いつでも元氣です。たゞ、新しい生命の產れて來

るのを待つてゐました』

花は、この賴りない世界に生れ出た時、太陽が、味方になつてくれたので力强く思つた。

その日の晩方、白い鳥が、空を舞つてゐて砂の上に咲いた花を見つけた。そして、嬉々として鳴き立てました。

『もう、おれ達は、この海岸から去らなければならない』

『なに、さう慌てることはない。もう一度雪が來たなら、あの花は、すぐに跡形なく凋んでしまふだらう』

白鳥の雛は、これから、知らぬ他國へ旅をするのをうれしがつて、はしやいでゐたしかし、親鳥は、まだ、當分この海岸を去らうといふ氣はなかつたのです。

その夜、哀れな花は、暗い海のとゞろくのを聞きました。そして、灰色の、夜が明けると、風は、怒つて、沖から突進して來ました。風は、あまり、勢强くやつて來たものだから、花の頭の上を通り過ぎてしまつた。しかし、その次に來た時は、注意深く、

地面を睨んで呪ふやうに吹いて來ました。

『つい、二三日前に、こゝへ雪が降つたのをお前は知らないのか。まだ、お前等の頭を出す時分でない」と、風は、花に向つて言つた。

花は、たゞ、ふるへるばかりで、默つてゐました。

「よし、俺達の領土を占領する氣なのか。生意氣な奴め！』

風は、花を罵つて、一揉みにしやうとしました。しかし、花は、小さかつたけれど、小さいだけに、自分を支へるだけの根を張つてゐました。赤い花瓣は、いくたびか無殘に、揉み潰されやうとしたが、風が、狂猛に襲ひかゝつて來るたびに、首を垂れて風をやり過し、そして、虛を見ては、頭を上げて、なよ〳〵と精いつぱいの力で戰つたのであります。

風は、夜になるまで、花を吹きつけてゐた。白鳥は、秋から、冬にかけて木の葉を飛ばし、波を蹴り、雪を碎いた、凄い力が、もはや風になくなつたのを知ると、夜の中に、友達を語らひ、この海岸に別れを告げて、親と子と互に呼びかはしながら、さ

らに寒い地方を指して旅立つたのでありました。

夜が明けると、崖の上の平原に、赤い花は一點の炎のやうに、昨夜からやまずに吹いてゐる風の中で、ひら〳〵と戰に勝つたごとく、誇らしげに見えました。それに引かへて、風は、なんとなく力が衰へて行きました。

この時まで、ぢつとして、沖の黑雲の中に硝子のやうな眼付をして、氷の着物を被た老婆は、こちらを見てゐたが、風が、いくら戰つても、もはや、彼方の平原をとり戻すことができなくなつたと知ると、頭を振りました。彼女の白髮は黑雲の中に、電光となつて閃いたのであります。

彼女は、最後に、雪を降らした。しかし、雪は、大地に落ると、すぐに後から、後から名殘りなく消えてしまつた赤い花は、雪の中にも、凋れずに咲いてゐました。

いつしか、征服力を失つた、風と雪とは、空で相抱いて、溶け合つて涙のやうに落ちて來ました。

長い間、このあたりを支配してゐた、老婆は、電光をほとばしらせ、雷を鳴らして、

殘りの雪と風の軍勢を從へて、もつと北の方へと引き上げて、行きました。

『もう、大丈夫だ。みんな頭を出せ……』と、この時赤い花は、できるだけ大きな聲を出して叫んだ。

すると、たちまちの間に、砂地を破つて、同じやうな無數の芽が、頭を出すと、一樣に赤い花が咲きました。平原はこれ等の赤い花で、埋まつた。それは、ちやうど幾千本となく、蠟燭を立てたやうに、赤い炎は、海から吹いて來る風に搖らめいたのです。

昨日まで、岩を嚙み、崖にぶつかつて來た波は、いまは媚びるやうにおとなしく、岸へ寄せてゐました。

この時、どこからか、子供がやつて來て、崖の上へ立ち沖の方を眺めながら、口笛を吹いてゐたが、やがて、花の咲いてゐる野原へ坐つて、朗らかにうたつたのであります。

おゝこの赤い花

土の炎、春が來た
雪と風の、苦しい戰のあとに
美と自由と平和のあることを
人間に、知らせるために！

田舍の人

最初に生れた子供が、まだ三つばりの時だつたから、いまから何年ばかり前にならう？私達は、古い、小さな平家に住んでゐました。

そして、庭に、くちなしの木があつて、白い花の咲いてゐたのが、かすかに記憶に殘つてゐます。

ある日、Kが、國許から、所用があつて、出て來るといふ通知に接しました。私とは、同鄕で同じくこちらの學校を出たのでしたが、私は、都會にとゞまり、彼は、田舍へ引込んだのでした。

誰しも、その頃は文化の中心で、華やかな都會にとゞまりたいと思つたのに、彼ばかりは、その意志がなかつたやうです。それも、田舍が好きだとか暮しいゝとかさういふ自身にとつて都合のいゝ理由ばかりからでなく、そこには、一種確固たる信念すら持つてゐたのでした。

いよ〳〵彼が、歸るといふ日、二人は下宿から出て、夕陽に彩られた、街の中をぶら〳〵と歩いて、語りました、ちやうど、そこは橋であつたが、二人は、欄干に凭りかゝつた。朝、晩、學校への往來や、また、散歩の折に見た河水がいつもと變らずに、さゝやき立て、流れてゐました。そして、柳の枝が、黄昏方の風に吹かれて、煙の立ち上る空へ、女の長い髪の毛のやうになびいてゐました。

Kは、この景色もこれで、しばらく見納めだと、心のうちに傷ましく思つたか、どうだか、彼は、やはり、自分の抱いた、信念について、語りつゞけるのでした。

『人間は、贅澤といふことを覺えてから、不幸になつたのだ、いゝ着物を着たり、いゝ品物を持つことが、どれ程、本當の幸福の意義にかなつてゐやう。だん〳〵暮しづらくなつたといつて、世間は、騒いでゐるが、人間は、昔も今も、三度の食事の量にたいして差のある筈がない。また、寒暑につけて着る物に、ちがひを生じたといふ譯でもない。これまでと人間の生活は、同じことなのだ、たゞその樣式を、人爲的に、

いろ〳〵と變へることによつて、はじめて、そこに幸と不幸とが生じたのだ。しかし、永久に人間は、自供自給することが正しいのだ、餘計な知識が、禍にこそなれ、何の益にならう。田舍に歸つて、私は、この眞理を傳へなければならない。百姓は、また、自から働いて、自から生きていくといふことを忘れてゐない。これを眞に自覺せしめるのだ。すべての人々が、この道に生きることを悟つたなら、その日こそこの社會に搾取し、搾取されるといふ、不正の事實が、全くなくなつてしまふ時だらう……』

これが、彼の、その時、語つた、あらましの意味でありました。學校にゐる間に彼は、興味をもつて、哲學に關するものを研究したのです。私はかういふことが、いまの社會で、行はれるだらうか、疑問を持たずに聞くことはできなかつたから、

『眞理には、ちがひないね。しかし、宗教としてだ、さうしたことが、資本主義文化に對してどれだけ力があるものだか……』と、考へながら言ひました。

すると、彼は、顏を赤くして、『常識的な、誰でも言ひさうなことを、君も、言ふのか』といはぬばかりに多少侮蔑した面持をして見せて、

『智は行動の前程だ。眞理は眞理にあらざるものを克服せずに置かないよ』と、Kは答へた。

その時から、七八年經つてゐたのであります。私は、その間、都會の下積となり、ルンペンな生活をつゞけてゐる自分を顧みるたびに、たとへ前派的な、ユウトピアンであらうと、恐らく、いつまでも確信を持つて、田舍で、百姓に伍してゐるであらうKの方が、まだしも、羨ましいやうな氣がしました。

Kからは、たよりがなかつたけれど、他の知人から、こんど村の踏切附近に新しく停車場ができたとか、この頃、小作問題が、大分やかましくなつたとか、その折々の知らせによつて、故郷の推移する有樣を知ることができたのでした。

その停車場ができたといふ處は、少年の時代によく遊んで、記憶に殘つてゐました河があつて、釣に行くと、縞蛇がこちらの岸から、あちらの岸へ、水を切つて、日光に鋭い姿を閃かしながら、走つたものだつた。また、濱の方へつゞく街道には、掛茶屋があつて、稀に行商人や旅人が立寄つて休んでゐるのを見ました。あの年の夏のこ

と、見慣れない托鉢僧が、こゝに腰をかけて、山の方を見ながら、來年は、不作だから氣をつけるがいゝと言つたさうだ。はたして、翌年は、この村の收穫は、てんでなかつた、この話が村に傳ると、誰いふとなく、

『弘法樣にちがひない。弘法樣は、昔から死なれずに、いまでもどこかの村を歩いてゐなさるといふから……』

その當座、こんな噂が、またひろまりました。私は、その時分から見ると、いつしか小作爭議にまで、世の中も變つたと思ひました。そして村の開けて行くのが、何となくうれしい氣がしたのでした。

『K君は、何用かあつて來るのかな、東京もあれから、變つた。來て見て驚くだらう……』

私は、體を横にして、濕つぽい、庭先をながめて、そこに、浮き出た、白い、くちなしの花に眼をとめたのでした。風があつて、横手の隣り境にある、竹の葉がわびしさうにさら〳〵と鳴つてゐました。

Kは、上京しました。しばらく見なかつたうちに、すつかり、田舍の人となりきつてゐた。顏の色も日に燒けて黑ければ、着物も、ぢみで兩方の脛が見ぇる程、短かつたのでした。

『村も、開けたらしが、少しは、景氣もよくなつたやうな樣子ですか』と、私は、たづねた。

『ところが、お話にならんのだ。ます〳〵苦しくなる一方さ、それが、みんなが、馬鹿だから、仕方がない、考へて見たまへ。彼等の働きには、かぎりがある。それを、縣道を開くだの、電氣を引くだの、停車場を設けるだの、いろ〳〵なことに運動する。これによつて益するものは、誰なのだ、俺は、みんなに反對しなければならぬといつても、幾人も、俺の言ふことに耳を傾けない。却つて、邪魔者扱ひにする。賑やかにでもなれば、生活が樂になると考へてゐる、無智には仕方がないよ。』

『それで、君は、こんど何か用でもあつて……』と、私は言ひました。

『少しばかり、消費組合の樣子を研究に來たのだ』

からKが、答へるのを聞くと、私には、やはり、彼らしい、なつかしい氣がしました。

二人は何年ぶりかでくつろいで酒を飲み、共に食事をして陶然としたのです。

ちやうど、その日、その時のこと。

『おとうさん、大變です！』

隣室で、妻の叫ぶ聲がしました。驚いて、私は、立上つた。Kも、あわてゝつゞきました。

『坊が、鏡臺の上に置いた、化粧水を半分ばかり飲んでしまつたのです』と妻の聲はふるへた。

『そんなところに置くから惡いのだ』と、私は、急に心臓をしめつけられたやうな氣がして、子供の顔を見ると、無邪氣に遊んでゐたのが、たまげて泣き出しました。

『君、毒だらうか？』私は、Kに、きゝました。

彼は、重苦しい顔付をして、だまつてゐたが、

『毒だらうね。にきびや、そばかすがとれる位だから、强烈な藥品にちがひない』と言つたのでした。私は、成程と、感じた。

『はやく、醫者へ、つれて行かなければ……』と妻を急ぎ立てました。

彼女は、泣く兒を負つてあたふたと出て行つた後で、私は氣が氣でなりませんでした。戸口を出たり、入つたりしてゐた。Kも、心配さうに暗くなつて行く室の中で、突立つてゐました。

『ヨチ、ヨチ……』と、いつて、子供をあやす聲がきこえて、其處へ妻が戻つて來ました。

『なんでもありませんの、毒になるやうなものなら顔にぬられないつて。アルコールが少しはひつてゐるから、興奮する位のものだといはれたので……安心しましたわ。

『なあんだ』

と、私は、思ふと、笑ふこともできなかつた。

Kはと見ると、

『虚偽ですね。都會では、そんな、たゞの水を高く賣るなんて』と、しみ〴〵と感心して、頭を傾けてゐました。

貧乏線に終始して

今も尙ほ、その境地から脱しないでゐる私にあつては、『貧乏時代』と、言つて、回顧する程のゆとりを心の上にも、また、實際の上にも持たないのでありますが、これまでに經驗したことの中で、思ひ出さるゝ二三の場合について、記して見ます。

何と言つても、はじめて、作家に志してから、苦しんだことは、獨自の境地を行かうとする努力と、その作品を直に金に換へなければ、衣食することができなかつたことです。文壇の大勢に、時としては、反抗したものを書き、それを賣らなければ、ならぬといふことは、すでに其處に矛盾が存してゐたからです。

少しの貯へもなく、家庭に缺乏を告げてゐるにかゝはらず、机に向つて、自分の理想を描かうとする——そこには、精神だけの飛躍が許されるとしても、直にペンを下に置いたと同時に、物質の缺乏から來る不安と惱みが感じられる。この二重の苦痛に

悶々とした時代であります。

自分の信ずるものを書き、それを金にしなければならぬ。さういふ悲劇的な場合にあつて、殆んど、狂熱的に、自己を鞭打つたものは、自分の意志より他にない。そして柔順で、献身的であつた、妻の愛に救はれたといふより他に、何ものかありません。

『彼は、其の日暮らしに、追はれてゐる』と、いふ蔑視から、資本家や、編輯者等が、いまだ一介の無名の文筆家に對して、彼等の立場から、冷遇しなかつたと何んで言へよう。況んや、私のやうに、逆境に立ち、尙ほ且つ反抗の態度に出て來た者を同情するより憎むのが寧ろ當然だつたから。しかし、私は、眞に自分を知つてくれた人でなければ、原稿を持つて、賴みに行つたことがなかつた。

あの時代の文壇の狀況と、その交つて來たいろ〳〵の人々について、私は、いつか書いて見たいと思つてゐるが、それはもつと私といふ人間が、冷靜になつて、私情で物を言はなくなつた時でなければ、言ふものでないと思つてゐます。

さて、その當時、賣るに着物もなく、書物もなく、妻が指にはめてゐた指輪を決

き取らせて、私が賣りに行つたことを覺えてゐます。かうした、數々の場合に際會するたびに、深く頭に印象されたものは、貧民を相手とする商賣の多くは、弱い者苛めをする吸血漢の寄り集りといふことでした。

第一質屋がそれであります。合法的に店を張つてゐるには相違ないけれど、苦しい中から、利子を收めて、さらに品物を受出すといふことが、すでにさうした境遇に於かれてゐる者には、殆んど不可能のことでした。不意に、澤山の金がはいるやうなことでもないかぎり、缺乏に惱んでゐる者が、それを受け出すといふことは、永久にできないからでした。

次に古物商といふやうなものです。何品によらず私達が困つて賣る時には、買つた時分の價格の三分の一にもならぬこと。一思ふに、はじめから、それ程の價値のない品物であるか、さもなければ、品物に價値のあるにかゝはらず、賣手の足許を見て、安く價切るか何れかでなければならぬ。いづれにしても、彼等が不當の利得を得つゝあることが分るのでした。

私達は實生活の上に於て、その場合、場合に面接して、この世の中といふところが、どんなものであるかを切實に知り得たのです。

もう一つ、貧困の時代に、苦しめられたものは、病氣の場合であります、手許に、いくらかの金がなくては、醫者を迎へることもできない。どんなに近い處でも、醫者は俥に乘つて來る。その俥代を拂はなければならず、そして、藥をもらひに行けば藥代は拂つて來なければならぬ。

私は、その金がないばかりに、ある夜友達の許へ訪ねて行つた。ちやうど友達は、夫婦で家を閉めて散歩に出かけたと見えて留守であつた。私は、そのまゝ家に歸つて苦しむ病人を見るに忍びず、木枯の吹く中を夜の十一時頃まで、閉つた門の傍に立つて友達の歸るのを待つてゐたことがあります。

かう書いてゐるうちにも、いろ〳〵友達に、厄介をかけたり、また、親切にしてもらつたりしたことが、思ひ出されます。そのことについては、他日、その機を得て感謝する時があらうと思ひます。

醫者は、仁術であるべきであるが、獨り、このことを醫者だけに求めるべきものでない。そんなら、今後、醫者は、何うなるべきであるか。もし、これを國有としたならばと思はれるのであります。慈善病院が、三つや四つできたゞけでは、無産階級が救はれるとは考へられない。

その日、その日、この社會には、どれ程、貧困のために、惱み、苦しみつゝある者があるであらうか。子供は、飢に泣き、夫妻これがために爭ひ、一家の中は、さながら地獄そのまゝに他ならぬものを想像するに難くない。そして、この頃のやうに、自から働かんとして職を求めつゝあるにかゝはらず、社會が、それに仕事を與へないとしたら。夫婦、親子の情を、壞廢するものは何ものでもない。みなこの貧乏あるがためであります。

私は、最も逆境時代に生れた、二人の子供を亡くしました。若し、健康でゐたならば二人は、いかにこの世の中が苦しいところであらうとも、また幾多生を享樂すべきこともあつたのにと考へると、親として、悔恨の深いものがあります。そして、夭折した

二兒のことを考へるたびに、せめて、正しく生きる爲には、餘生をいかなる苛竦な鞭で打たるゝとも辭さないと思ふのです。

かうした苦しみは、獨り私達ばかりでなかつた。そして、私達が、まだまだどん底の生活をして來たとは思はれない。のみならず假りに、私達だけが、仕合せになつたとしても、永久に安心できることだらうか。この觀念は、いつしか、私をして、階級戰の必然をすら敎へてやるに至つたのでした。

そして、また、ある時には、ラスコリニコフを空想家として嗤ふことができなくなつた。

いづれにしても、この社會から、生きるための苦痛と、悲劇を、無くしたいものです。そのことは、決して、不可能なことではない。人間の力によつて、ある程度まで、なされるといふことをも信ずるからです。

何うして子供の時分に感じたことは正しきか

家の前を、哀れな風をした子供が、父親に、またある時は、母親につれられて歩るいて行く、それは、町へ出て、終日物を乞ふて廻はつたのが、晩方になつたので、自分達の住んでゐる、遠い村へ歸つて行くのでありました。

私は、ぢつと、その子供と、父親を見送らずにはゐられなかつた。なぜなら、風は、寒いし、日が暮れかゝらうとするのに、ぬかるみの中を默つて行くからであります。子供は、はだしで、短かい着物を被てゐた。そして、足の指も、手の指も赤くしてゐました。やがて、その姿は、だん〳〵遠ざかつて、見ゑなくなつてしまつた。

『可哀さうに』と、私は、心のうちで思つた。

家の内へはいつてからも、その姿が目に殘つてゐて忘れることができなかつた。明るいランプの下で、夕飯の膳に向つた時も、やはり、その姿は思ひ出された。

『あの乞食の子は、何うしたらう。まだ、歩るいてゐるか知らん』と思つた。
床の中にはいつて、枕に頭をつけてからも、私は、やはり、それを忘れることができなかつた。
『もう、子供は、家へ歸つたらうか』と、思つた。
私は、疲れた子供が家に歸つてからの有樣などを空想の眼に描いたのであります。たとへ、貧しくとも、母や、父や、また弟妹達といつしよに、寛いたら、樂しからうといふやうなことが、思はれたのであつた。
しかし、祖母は、かう言つた。
『家へ歸つたつて、暖かいものを食べることも、また、腹が空いてゐても、おなかいつぱい食べることもできないのだよ、寒くて、暗い、小舍の中へ、ちぢこまつて寢なければならんのだ……』
それを聞いた時に、私は、自分の頭に描いた、明るい光景が、急に消されてしまつたことを、どんなに驚いたでありませう。

しばらく、夜の空を渡る、風の音に、耳をすましてゐると、いろ〳〵な疑ひが、小さな頭の中に湧いたのでありました。
第一に、自分が、もし、その乞食の子であつたら、どうであらうといふことが、頭に浮んだのであります。そして、自分が、そんなやうな境遇に生れて來なかつたことを、何よりも、嬉しく思はずにゐられなかつたが、また、それが、偶然であるといふやうにも考へられて、幸福を感じながらも、何となく、心のさびしさ、たよりなさを何うすることもできなかつたのでした。
次に、頭の中に浮んだことは、父親や、母親が、乞食をしなければならぬのには、何等かの缺點がその人達にあるやうに思はれたけれど、その子供には、何の罪もないといふことでした。
しかし、さうは考へても、私達は、父親といつしよに、哀れな風をした子供が、家の前を通つて行く時に、なるたけ、汚ならしいものから遠ざかるといふやうに、道を開いたのです。しかも、子供心ながらに、それを決していゝことだとは思はなかつた。

私は、我儘であり、母や、祖母を困らした時分に、いくら、道理を聞かされても、それに服しようとはしなかつたが、

『あれを見い、お前より、もつと小さい子供が、この寒いのに、草鞋もはかんで、歩いて行くでないか。可哀さうに……、我儘を言ふものでない』と、祖母に言はれると、私は、急に悲しくなつて、しぐれて行く空を見て、その下を何處となく行く彼等の姿を、しばらくだまつて見送つたのが常でした。

○

また、私は、小さい時から、犬や、猫を愛しました。物は言はぬけれど、これ等の動物は、よく人間の氣持や、感情を理解するやうに思はれたのでした。

人間のやうに、喜ばしい時、苦しい時に、ものを言ひ得ないといふことが、一層、これ等の動物を憐れに感じさせたのであります。

私は、いくら可愛がつてやつても、足りないといふやうに、感じたこともありました。しかし、そんな時、ずつと、自分の愛してゐる犬や、猫を見つめて、私は、捨てられ

た犬や、猫のあることを考へずにはゐられなかつたのです。

幸福に、暮らすものゝある中に、何うして、ある者は不幸であらなければならぬか？　なんで、みんなが、幸福であり得ることはできないのか。正しく、罪もない、善良のものまでが、偶然から、不幸に日を送り、また、ある者は幸福に送るといふことは、なぜであらうか。私は、子供の時分に、このことを考へると、不思議でならなかつたのである。そして、大きくなれば、世の中のことは分るであらう、さう思つて、來たのでありました。

このことは、獨り、私ばかりの經驗ではなかつたらうと思はれる、みんなが曾てはさういふやうに考へた時代があつたにちがひない。

正しい心の持主ならばさうあるのがあたりまへだから。しかし、みんなが大人になつた時に、そんなやうな考へをいつまでも持つてゐたらうか？。

私は、子供の時分を顧みて、その時分に感じたことが一番に正しかつたやうに思ふのです。そして、その時分の正しい感じをいつまでも持つてゐる人は、人間として最

もなつかしまれる、善い人であらうと思はれるのです。

もし、誰でも、無邪氣な弟の遊ぶ樣子を見たり、可愛らしい妹の顏を見る時に、深い愛を感ずるでありませう。そして、彼等が、幸福に、平和に成長するやうに、心に祈るでありませう。獨り、それは自分の弟や、妹だからではない。すべて、このやうに善良で、無邪氣な、幼ないものに對して、全世界のかうした子供達に對して、これがほんたうに正しいことであるからです。

氣候外さまぐ

今年のやうに、新綠の五月が、寒く曇り勝であつては、少しもいゝことはなかつたが、私は、一年の中でもこの月を最も愛するのです。獨り、この月に限つたことではない、いゝ天氣の日、いゝ季節の時は、眞に、生きてゐるといふこと、この世の中に生れ出てきた甲斐あるといふことの喜びをしみ〳〵と味はふのでありました。

思ふに、人間は、誰しも、自からの生を樂しまんがために、生きてゐるといふことができませう。その生を樂しましめるものは、いろ〳〵あらうけれど、私にとつて、氣候とその外、草木の美とが、力强く、重なることを感ぜしめます。

もとより、その人、各の環境によつて、生に對する執着の條件も異なるにちがひない。が、私からの現在の生活からいへば、この二つを擧げることができます。

天氣具合が、どれ程、深く、鋭く、氣分の上に影響するか。ひとつは、常に、室內

にゐて机に向つてゐるためでもあるが、暗い、寒び日には、神經までがみぢめに苛まれて、のび〳〵とした想像も空想も湧いて來ないのであります。

私は、室の周圍の窓を硝子戸にして、充分外からの光線のはいるやうにはして置くけれど、外界の暗い日は、室の内部も陰氣になるのは自然である。

清水港の附近は、十二月頃には、すでに苺が熟するといふことを聞いた時、日本の内地にもそんな氣候のいゝところがあるのだらうかと思ひました。そして、一度は、さうしたところへ行つて住みたいと思ひました。

私は、北國で生れたけれど、東京に住居してから、二十餘年にもなり、却つて生れた土地よりは、こちらに長くゐるので、いつしか東京の氣候に、體質までが同化されてゐるやうに感じられます。よく、作品に、北國の風景を叙す場合、この頃のものには、却つて空想の分子が多く、實感から遠ざかつてゐるものが多いことを、こんど、珍らしく經驗したのでした。

これまで、たま〳〵歸省したけれど、大概は、夏の頃でした。そして、冬とか春と

かには、その長い年月の間に、殆んど歸つたこともなかつたので、雪の積つた光景も子供の時分の印象が眼に殘つてゐるだけで、近年は故國の冬の光景を、全く知らないのであります。

迂遠といへば、まだ、この頃流行しつゝあるスキーを見たことがないのです。それは、この四月中頃に歸省したのでした。

上野山、飛鳥山の櫻花は、まさに盛りでありました。しかるに高原の信州にはいると蕭條として、櫻の花は咲くどころではない。信越の境には妙高、伊綱の諸山をはじめ白雪が皚々としてゐました。田口や、關山では、或は、スキイをやつてゐたかも知れない、けれど、汽車が頸城の平野にかゝると、四方の連峯は眞白ではあつたけれど平地には、雪がところ〴〵しかなく、圃には、梅や桃の花もいつしよに、彼岸櫻の花が綻びかけてゐたのです。雪は多いけれど、信州より、越後の方は、氣候がずつと暖かいのを知つた。

創作の初期の時分、『灰色の空』といふ叙景をよく使つて笑はれたものです。しかし、

越後の空は、字義通りであつて、的確の形容であることを、こんど自から感じたのでした。網の目のやうに、地上を陰らして雲が低く速かに過ぎるかと思ふと雨が颯と降り、忽ち晴れで、日光が輝くといふふうに、雲、風、雨、日光の變化は、實に慌しかつた。

故都の四月、雪が消えてしまつて頃の春先の氣候が尙ほこの通りなのでした。これを東京の氣候と比較したら、險しさと、柔らかさに於て、全く同一に語ることができません。曾て、舞子の濱で雨の降る日を過した時に、飽迄、空の明いのに驚かされたことがあつたが、北國の氣候は、その程度に於て、東京の氣候と隔りがあるとも言へるのでした。子供の時分に、東京と聞けば明るい空が思はれ、賑やかないゝところのやうに思つたことも、無理ではありません。

また四月頃の北國の天候は、どこか、高山の空合を思はせたのです、烈しい風に吹かれて、木々の梢に、繪具よりも濃い、黄、綠の芽が萠しかけてゐました。

私は、植物に對してもかぎりなき愛を有するものです。白樺、撫、石楠花、落葉松、

さうした高山や、溪谷にあるものと、蓮や、睡蓮のやうな、水鄕にあるものと、また平地に繁茂するやうな雜木と、各の特色を異にするものに對して、個々の趣きを感ずるが故に、またそれを眺めることによつて、さま〳〵な空想に耽ることを常としてゐます。

氣候と其の變化が、鋭敏に神經に感ぜられると同じく、草木の變化する有樣が、喜、悲複雜な味ひを心の上にもたらすものです、五月雨時に、ふさはしい、くちなしや、さつきの細かな葉の重なり合つてゐる姿、また盛夏に、ふさはしい睡蓮、百日紅、撫、白樺、それを見ることによつて、或は藪蔭を、或は、幽谷の空想を恣まゝにすることもできるのでした。

原稿紙に一枚字を書いては、室の中をぐる〳〵歩るき廻はり、それから緣側に出て家根の上に並べた鉢植を凝視し、また、何をか不意に、頭に呼び出して、机の前に戻り、五行書き、一枚書くと、また魔に付かれてゞもゐるやうに、慌しく起つて、室の裡をぐる〳〵と歩るき、次に緣側へ出て、眼をずつと草や、木の上に向けてゐるが、

時には家根の上へまで、欄干を跨いで出て、一鉢、一鉢、手に取り上げて、鉢を撫しながら見入つたこともあります。もし、この時、何も知らずに、誰か、傍で見てゐる者があつたら、恐らく、私を狂人と思つたでありませう。しかし、これが私の生活である上は何と評されても仕方がありません。

七月に題す

夏になると、なぜ、ふるさとを思ふのでありませうか。

地平線の彼方に、いつも、ふるさとはある筈である。仕事にかまけて、日頃は、それを思ひ出すこともなく、忘れてゐる。稀に、たよりをきいて、當時のことを思ひ出し、或は知人の面影などを眼に浮べて、なつかしく感ずるとも、それがために、何を措いても歸らうなどとは、考へなかつたでありませう。

それが、夏になると、なぜ、ふるさとが戀しくなるのでありませうか。

「ちよつと、旅行に出かけてきます」と、人が言ふのをきくにつけ、湧然として、胸に生ずるのは、ふるさとを偲ぶ矢の如き歸心であります。

もし、それ、赤銅色に、大地を彩る日の傾きかけた晝過ぎ、緣先に出て、茫然と睡蓮の鉢を見つめてゐると、どこからか、大砲の音のやうな、鈍い、遠雷のひびきを聞

きます。そして、琥珀色の雲の峯が、重疊として、青白く熱によどんだ空に起伏するのが見られます。

かゝる時にこそ、誰人も、まさに、思郷の念に堪へないでありませう。いまも、川風は頰を吹き、笹の鳴り音は、耳に殘り、廣い野原は活々として、眼に輝いてよみがへる。

私は、考へます。故郷の山河や、故人は、常に村を出た人達に對して呼びかけてゐる。たとへ、路は幾百里隔つとも、また再び相見ることはできなくとも、自然は無聲に叫び、魂は、互に相慕ふためです。しかし、故郷は、常に、雲の彼方にある。かくのごときは、獨り、夏とは、かぎらざるに？

人間の母は、自然であります。ふるさとの自然は、その人を大きく育てゝくれたものです。たとへ、彼等は、意識せずとも、子供の時代に、裸體の自分を抱いて、いつくしんでくれた、夏の川や、また、氣まゝに遊ばしてくれた、野原のかぎりなき愛を、人々は、永久に忘れ得ぬがためでありませう。あゝ七月、青い海、赤熱の野原よ。

眞實を踏みにじる

豪農の石門の内側には、一本の樫の木があつた。素朴な風貌をして、黒い葉が繁るに似ず、極めて、不釣合な若々しい綠色の芽に他の花が散つた。六月の空に萠したのである。

風が、それに當つてゐた。恐らく、同時に廣い野原を吹いて、またどこかの林に美しいさゞなみを立てるであらう。その風も、この黒ずんだ樫の木に戯れる時には、さ程の自由さも、喜ばしさも見られなかつた。

この木の下には、支那燒の黄色な水甕が置かれた。ちよつと類のない程立派なものだつた。主人は、この甕を所有することを人々に誇つた。うちにたゝへられた水は綠を含んで、風におのゝくたびにその枝影を映したのである。瓢々として、飛ぶ雲を、底の知れない空の肌をさへ、また水は、その面に映した。とはいへ、誰が、この天と地

の瞑合を心にとめたであらう……。無關係に、百姓等は、田や、圃で汗を滴らして働いてゐた。主人は、うす暗い、鳥影も稀にしか射さない書院で、書畫を懸けたり、抽斗から株券を出して、算盤をせりあげたりした。

たま〳〵咽喉の渴いた、行商人がこの甕に眼をつけて、石門から覗くと、掃除人に威嚇されたり番犬に吼えられて逃げて行つたことがある。二三年前の不作の時分に小作人達は、この豪農と爭つた。適度の寬容は、必要だと悟つてから、子供達が、門内へはいつても、やかましく叱らなかつた。赤ん坊を脊中に負つた子供が、それは、どこからともなくさはやかに夏の香氣が流れて來る晝すぎであつた。

『司馬溫公は、木登りして、甕の中へ落つた子供を助けようと思つて、甕に石を投げて破つたと先生が言ひなさつた。もし、誰か、木に上つて、この甕の中へ落つたら、石を投げて甕を破るかや』と、樫の木の傍の大きな甕を見ながら言つた。

寒村の、小學校で、背の低い、口の大きい先生が、修身の時間に、司馬溫公の話をして聞かせた。生徒等は、誰一人として物質よりは生命の貴いことを信じて、疑ひを

いだかなかつたけれど、この金持が、大事にしてゐる甕を自から進んで、叩き割ると言ひ得るものがなかつた。

Kは、みんなの顏を見廻はした。かういふ皮肉な問ひを出した。一番年上の顏には一種狡さうな卑しい笑ひが浮んでゐた。

『もし、地主さんの耳にはいつたら、大へんだからな。誰も破つていゝなどゝは言へまい?』と、言つて、あざ笑つたのである。

成程さうであつた。互に、顏と顏とを卑屈さうに見合はすばかりであつた。

『俺は、すぐに、誰か呼んで來る……。』

『誰もゐなかつたら、どうする』

『大きな聲でわめく』

『馬鹿、そんな間があるかい』

『俺は、長い竿を持つて來る』

『どこで、その竿をさがして來る』

『……』

『俺は、木に上つて帶をおろしてやる』

『そんな暇があるかい』

そこに集つた子供達は、眞劍に考へた。そして、どうかして、甕を碎かずに落ちた友の命を救ふ途を見出さうとした。

Kは、堅く口をつぐんでゐた。眼からは熱い涙が湧いた。

『俺が、石を投げつけて、この甕を碎いてやる』

空靈な地平線に、日暮方にかけて、一塊の雲が湧いた。それが甑の上に擴がり、森のいたゞきを掩ひ、日光を遮り、金矢銀箭を亂射して、雷雨となつた、宇宙は、靜寂の裡に、はかり知れない變化を見せたのである。ちやうど、その天氣の變る前であつた。一人の老僧が、野中の道を歩いて、殆んど毎日のやうに、村へ入つて來る。

百姓家の前に立ち、小さな聲を鳴らしながら經をあげる。百姓等は、野良へ出て、家には老人か、子供しかゐない。さもなければ、晝の休みに、彼等は圃から歸つて休

んでゐる。

磬の音は、燃消する蠟燭の火のやうに、靜かな天地の注意を一點に集めた。百姓等は、夢の中にこの磬の音を聞いた。泣いてゐる赤ん坊は、だまつてしまつた。老人は立つて門口まで行つた。そして、一握りの米を僧のさゝげてゐた、鐵鉢の中へいれた。

僧は、別に、被つてゐる笠に手をかけなければ、また頭も下げなかつた。『お通り』と、斷つた家より、喜捨した家の前に、心持長く立つて、經をあげたに過ぎない。その時は、米のかはりに、一錢投げる家もあれば、また豆をいれてくれる者もあつた。僧は、それが一日の糧に足りれば、また、いづこともなく歸つて行つた。

そうかと、思ふともう暗くなりかゝつた晩方、この僧の姿を、村の中で見たことも ある。

『貫ひがなかつたのだな』と、誰やらが言つた。

生きてゐる者は、食はなければならぬ、食ふためには働かなければならぬ。とはい

へ、働く者は現實以外について考へぬだろうか。

『人生は、めぐみ合ふことだ。彼等のために、幸福を祈つてやらう！』

僧は、門口に立つ時に、磬を鳴らしながら、心のうちでかう思つたにちがいない。

流浪者に對する、思慕の情は、誰にも、本能的であるものだ。子供達は、この托鉢僧に對してなつかしみをすら抱いたそして、侮蔑するものはなかつた。

子供達がこの石門のところで遊んでゐると、磬の音がきこえた。この時、念佛を唱へながら、笠を眼深に被つた僧が、眩しい空の下をこちらに歩いて來た。

先刻、この家の主人が、屋敷のまはりを散歩してゐた。子供達は、一錢でも喜捨するであらうかといふことを、噂の人間だけに、興味をもつて眺めてゐた。

僧は、噂を聞いてゐたが、どうか、他の家の戸口に立つたやうに、こゝへも石門からはいつて行つた。百日紅の下に主人は顔に嘲笑を浮べて、それを見守つてゐたのである。

「懲性もなく、毎日、うるさく來るやつだ。ひとつ、もうこれから、はいつて來ない

やうに、してやらうか』

刹那、主人の顔に動いた不純な表情を、子供達の敏感な眼は見のがさなかつた。

主人は、足許の小石を拾ふと、つゝましやかに僧が捧げてゐる鐵鉢の中へ投げこんだ。

『家は、宗旨違ひだ。毎日ゐらしても、あげられるものは石ころ位のもんじゃ』と言つて、カラ、カラと笑つた。

僧は、これに答へなかつた。無關心のごとく、しばらく經を讀んでゐたが、踵を外の方へ返した。そして石の門から、出て鐵鉢の中から石を拾つて往來へ落した。

Kは、始終を見た。この無抵抗者に對する暴虐に、少年の眼には、悲憤の熱い涙がにじんだ。

『眞實を踏みにじつたのだ、あの甕を破れ！』かう口のうちで叫んだ。

『誰もこれに對して憤らないのだらうか？　金があるから、地主だから、人間の誠實を侮辱していゝのか？　俺があの甕を破つて見せる！』

Kは、往來に落ちてゐる石を拾つて、堅く握りしめた。

不意に、すさまじい音がした。誰か、石を甕に投げつけたのだ。遊んでゐる子供達は、それを知ると眼を見張つて、びつくりした。黄色な水甕は、當つた石を刎ね返したが、石には力がいつぱい籠つてゐたゝめ、其處を白く穿つて、甕に大きな龜裂を生じた。

『Kがしたのだ！　俺ではないぞ……』

たちまち、村中の騒ぎになつた。Kは、すぐに逃げて、どこへか姿を隠してしまつたからである。ちやうどこの時、あちらの空で、雷が鳴つた。

この事件と何の關係がなかつたにかゝはらず、脊の低い、口の大きな修身の受持教師は、他へ轉仕しなければならなかつた。Kは、當然退校させられた。兩親は、彼を家から追ひ出して、町へやり、商家の徒弟とした。

後年に至つて、彼が、この社會の組織を認識するやうになつた時、被搾取者の解放運動の集團に加つた。

しかし、彼は、永久のロマンチストである。彼のほんとうの友は、權力を握らうとする人々の中に見出すことはできなかつた。そして、それは、虐げられつゝある無知の百姓の間でなければならぬと考へた。

流浪の生活が、彼の前にある。行く雲のごとく、流るゝ水の如く、一切の執着を斷つた時に、尚ほ、燒くが如き、眞實が求められた。眞實だけが、子供の時分から彼の魂を搖り動かしたのだ。

疲れた足を途上に佇めて、草の輝きを見ると、かの托鉢僧の姿が眼の前に浮ぶのである。

密生した茶の木

土手の上に、茶の木が密生してゐました。その木は年を老つてゐると見えて、かなりに太い幹が曲りくねつて、互に、幾つかの枝を持ち、技と枝とは、組合つてゐました。しかし、それは、覗いて見なければ、分らぬことで、外面から見れば、こんもりとした、大きな、圓い桓根となつてゐます。

芋蔓が、その下の濕つた、やはらかな地を破つて、黑く、堅い、荒れた幹を這つてその高い頭の上まで伸びてゐるのでした。エナメルのやうな、芋の若葉はちやうど茶の頂きに咲いた、不思議な花のやうに、風に搖れると、黑い翅に赤の斑點のある大きな蝶が、どこからか飛んで來て、その葉の上に止つたことがあります。

自分は、それよりは、その芋の芽が伸びてもはや、何ものにも縋るところがなく、なよ〳〵と不安に風のなびく方向に動いてゐる時その上に垂かゝつた、青い空を見入

りました。

一種の悲哀が、心の底に湧いて來るのです、そして、しばらく、ぼんやりとして、遠いところのことなどを空想するのでした。

獨り、芋の蔓の若葉ばかりで、ありませんでした。茶の木の新芽は、手に取つて見れば、うす黃色だつたが、日の光りの下に照らされてゐては、全く、銀をとかしたやうに見えたのでした。

すべてのものゝ更生について、考へさせられずにはゐられませんでした。

ある日、その傍の家から、腰の曲つた、白髮のお婆さんが出て、小さな笊の中へ、茶の新芽を摘んでは、いれてゐました。これを見て、

『お婆さんは、手製の、新茶を造らうとするのだな。』と何となくあはれ深いものゝやうに、長閑な感じがされたのでした。

しかし、摘むとはいつたものゝ、高いところへは、手のとゞく筈もなし、どこを摘んだのか、殆んど分らない位でした。

やがて、それは、青葉に變つてしまひました。八月の黄昏に、金色に紅を流したやうな夕日が、この垣根を越して、あちらの建物の背後に沈んだ。

この時刻に、蜘蛛が、芋の蔓から、茶の木の横へ伸びた枝にかけて、網を張ることに忙しかつた。自分は、利巧な羽蟲が、それを避けて舞踏するのを眺めたのであります。

秋になると、黄色くなつて、枯れた葉が、獨り、自分だけが、黒ずんでゐる茶の木の頭で、寒い風に吹かれて鳴つてゐました。春の日に、伸び上て、空を慕つたものが、いまどこにもその姿を見ることができなかつた。灰色の眼をした。意地悪さうな空が殘忍に彼の屍を見下してゐます。

『貸家から貸家へ――』

自分は、この都會の郊外を、あちら、こちらと半生をすでに送つたのであるが、そのたびに越して行つた家の周圍の光景を思ひ出すがまゝに、瞳に描いたのでした。

人間は、蟲や、草よりは、長い生命を持つのを常とするけれど、茶の木のやうなものは人間よりも、長く生きのびるであらうといふやうなことまで考へて、風に吹き晒らされても平氣でゐる、土手の上の木を眺めてゐたのでした。

冬は、一年の中で、一番長くて、また深刻のやうな氣がしました。野に、圃に、餌を探がしても空しかつた雀等は、みんな人間の住家の方へと集つて來た。そして、家根瓦の上に止つて、さびしさうに、風の吹いて行く方を見つめ體を圓くしてぢつとしてゐるのもあれば、廂から廂へと飛び廻はりながら鳴いてゐるのもある。そのうちに、霜の降る、凍り破れさうな夜がやつて來る。雀等は、慌て巣に歸るのでしたが、この茶の木の繁みの中を、安息所にしてゐるものもあつたのです。

茶の木の中で、雀の鳴聲を聞くのが珍らしくなかつた。たま〳〵その下を通りかゝつた猫が、その聲を聞きつけて、ぢつと立止つて、覗いてゐたが、曲りくねつた幹と互に組合つた小枝のために、どうすることもできなかつたのです。

芋の蔓、老婆、蝶、小鳥、と考へて來ると、茶の木の存在は、複雜な影を周圍に投げてゐたのでした。しかも、茶の木の身邊は、深く土手に根を下ろして、生長を妨げ

る何ものもないためにまことに安全に思はれたのでした。

春になつた時に、自分は、二たび、去年の光景が見られると思つた。なぜなら、去年は一昨年にあつたことを、そのまゝ繰り返へしたのに過ぎなかつたのです……。

一日、自分は、窓を開けて見て驚いた。茶の木は、根本から刈り拂はれて、そこには一本もなかつたのでした。地主は、地ならしをして、跡を宅地にする考へらしかつたのです。

樂しみを奪はれた老婆や、脊伸びをして跳つた芋蔓や、憐れな小鳥等を今更の如く思ひ出して眼に描きました。

芽

風雨霜雪を凌いで、生れ立つてきた木が、弱ることがある。その時、思ひきつて、枝を拂ひます。もしからすることによつて、甦へるものなら、新しい芽をふくが、却つて、その負傷に堪へず、そのまゝ枯死するものを見ることがあります。要するに、内在する生命の力如何にかゝはることです。

また、これと同じ例を、靡亂した平野に於ても見ることがある。雜草は、茂るだけ恣まに茂つて、他のものゝ生ずる餘地をなからしめる程地を掩うてゐます。この時、豪雨と暴風が共に一過すれば、たちまち、雜草は倒れ、堅くなつた土は穿たれるのである。もし、この下に、生き殘つてゐた何ものかの芽があれば、競つて頭を出し、いつしか、その平野は新しい生氣のあるこれ等の草が占領してしまふでありませう。

すべて、新らしい芽が生ずる時には、非常の時機に際會するを常とします。この地

上の文化が、俗惡、卑近に、誤れる現實主義によつて、硬化されてゐることは、すでに久しいものだ。そして正義、友愛、同情等の人間的感情をして發露するに餘地なからしめることは、云爲するに及ばないのであります。

鋭い、彈力のある梢は、寒風にくしけづられて、一層、空に飛躍して叫び、精悍な蜂は最後の一疋となるまで、自分達の巣を守り、また忍從そのものゝやうな蟻は、覆されても、覆されても、彼等の蟻蛭を建設しなければ止まぬでありませう。

彼等は、終に戰ふものゝ勝利を知るからです。至高の良心を基調となす文藝が、いかに功利主義者によつて、踏み荒されて來たか？　こゝに尙ほ枯死せずして、生き殘る理想主義の流れがあるなら、それこそ、堅土を押し破つて出る芽でなくて何でありませう。

思ふに、ロマンチシズムの波は、人生の更變につれて、幾たびか、その不滅にして灼熱の色彩を更改したのである。

彼等の悲哀と自負

彼は、父親の顔を覺えてゐませんでした。彼の小さな時分に家族を村に殘して海を渡つて、出稼に行つた父親は、それぎり幾年經つても、故郷へ歸つて來ることはなかつたからです

彼は、だん〳〵物心がつくやうになつて、父親を戀ふる情がいよ〳〵募りました。北風が破れた窓をたゝく晩など、ランプの下で、祖母に向つて、

『おばあさん、うちのお父さんは、いつ歸つて來るの？』と、たづねました。

日頃から、無口で、いつも下を向いて考へ込んでゐるやうな白髪のおばあさんには、なんでもこの世の中のことが分つてゐて、聞けば、敎へてくれるものと、彼は思つてゐたからでした。すると、祖母は、彼の頭をなでゝ、

『遠くて、遠くて、なか〳〵歸つて來られない。海の上は、いつも、眞黑で雲が渦卷

いて、雨が降り風が吹き荒れてゐる。そんな處を無事で、渡られるやうな船は一つもないから、行くこともできなければ、また歸ることもできない』

いつも、同じい話をおばあさんは、言つて聞かせたのでした。彼は、この話を聞くと父親に遇ふのは、及びもないことだと思ひました。そして、いつしか、父のことよりも、物凄い、海の光景を茫然として、空想に描いたのです。

『おばあさん、いま頃も、その海の上は、眞暗で風が荒れてゐるのだね』

『あゝ、風が吹いて、波がどたり、どたりと打つてゐる』

『それきりかい?』

おばあさんは、頭を動かしました。そのたびに銀色の白髪がランプの光にきらめいた。

『暗い海の上を鬼火が飛んでゐるのだ』

彼は、未知の世界を空想することに疲れてそのうちに、眠つてしまふのを常としました。

ある時、青い空を燕が飛んでゐるのを見て、もし、あの鳥で、自分があつたら、北を指して、飛んで行くであらうと思つたのです。すると、いつしか、自分は、燕になつてゐました。そして、晩方のうす明りを透して、下の大海原を見下すと、どこの船か、難破して、長い帆布は、波にたゞよひ、壞れた船は、赤い腹を出して、浮きつ沈みつしてゐるのでありました。

彼は、覺えず、往來に立つて、大聲を出して叫びました。そして、駈けて家にはいるとおばあさんの袂にすがつたのです。

『俺も、大きくなると、海のあつちへ出稼にいくんだ』

『いゝや、お前は、どつこへもやれない、いくら貧乏しても、三人はこの村で暮すのだ』と、祖母は言ひました。

しかし、彼が、大きくなると、自分の父親は、鑛山に行つたといふことが分つた。そこに、いまも達者で働いてゐるとは考へられなかつた。全くたよりのないのを見れば死んだにちがひない。たゞ、いつ、どうして死んだかを知らなかつた。坑の内で、

瓦斯が發火して、燒け死んだものか、或は、幾千尺の下で、鶴嘴を振つて、壁に對つてゐる時に、岩が落下して、壓殺されたものか、そのいづれかであらうと想像されたのでした。なぜなら、かうした運命にあつたのは、彼の父親ばかりでなく、この寒村に生れたばかりに、出稼しなければならぬものが、他にも澤山あつたからでした。

『いくら、金になつても、一人息子を鑛山へはやれない』と、氣の小さな、物言ひのせか〳〵した母親は、言つてゐたが、彼は海を渡つて、北にこそ行かなかつたが、そして、父親の行つたであらう、同じ道を通らなかつたが、やはり、村を出て、處さだめぬ、自由勞働者になつてしまつたのでした。

彼の生活は、都會のアスファルトの上からはじまりました。

身のまはりを自動車が走り、電車が通りました。ある時は、頭の上を汽車が、熱い息を吹きながら、過ぎました。そして、鐵管工事の時には、暗い穴の中で働きました。どこかの炭坑で、火を失して内部に働いてゐる者が、四五十人もあつたが、その坑の

扉を閉めて他の坑に火を移らせなかつたために、それ等の人達を見殺しにしてしまつたと、新聞に書かれたのを見た時、彼は、手に握つてゐた鶴嘴を投出して、あちらの青い雲切のした、ビルヂングの頂きの空に、深い溜息とゝもに仰ぎました。

顏を知らない、不幸な父親のことを思ひ出したからです。そして、恐らく、同じやうな運命であつたらうと考へられたのでした。すると、同時に、人の好い、白髮の祖母の顏が浮びました。

『黑雲が渦卷いて、眞暗な海の上には、雨が降り、風が吹き荒れてゐる。行くこともできなければ、また歸ることもできない』

かう話して、父を知らうとする孫の心をあきらめさせようとした、眞情を悟ることができるやうな氣がしました。

『あの、工場の、高い煙突から出る煙……その下には、石炭を焚いて、機械が働いてゐるのだ。何人か、命がけで、その石炭を掘り、鐵を掘り出したか？　それだのに、誰が、俺の死んだ父親のことを思ひ出してくれるだらう……』

彼は、しばらく、默然として、涙にくれてゐました。しかし、すぐに、氣を取り直して自分の仕事に向つてせつせと、働き出したのでした。

父親と……彼……この二代の忠實な勞働者の上にも、いつか週期的の不景氣は、見舞つて來るやうになりました。彼は、失業して、はや、幾日目かになります。

その日も、街をうろついて、空しく戻るところでした。途の上に立止つて、目まぐるしい光景を見ると、自動車に、電車に、坦々たる道路の上を面白さうに、車は滑つてゐました。

『この路は、ひとりでに平らでないのだ、俺の鶴嘴がはいつてゐる處だけでも、十ケ所や、二十ケ所ぢやない。みんな勞働者の汗と脂で、固めたやうなものだ……』

こんなことを追想しながら、公園へはいつて池の邊りで休みました。晩方にはE停車場のガードの下で、同鄕の男Fに遇ふ約束がしてあつたのです。Fと彼は、殆んど同時代に生れました。そして、ちやうど、前後して、村を出たのであります。Fは、いまはトラックの運轉手となつて、働いてゐました。

『何か、俺のできさうな仕事が見付かつたのかなきつと、倉庫の荷揚げかも知れない。なんだつていゝ。あの男も、貧乏な家に生れて、子供の頃から、苦勞をしたものだ……』

後は、Fと少年時代に、石を投げたり、獨樂を廻はしたりして、遊んだ、かすかな記憶を喚び起しながら、藤棚の陰から、陽ざしのする池の面に、眞赤に浮き上つて、無心に泳いでゐる鯉をぼんやりとながめてゐました。

それ等の金魚や、鯉たちは、さうして生きてゐることについて、少しの不安も感じてゐないやうに見えました。水は、いつも涸れることなく、人間は、いつも、餌をくれるものと思つてゐるやうです。これにくらべて、自分達の生活は、なんと不安であり、みじめであらうか？　かうした、魚の生活よりも、自分達の生活が、不安であつて、それで、果していゝものだらうかと考へられた時に、彼は、毅然として、立上りました。すると、電車が動き、煙の上つてゐる都會が眼に映つたのです。

『さうだ。俺達、勞働者が、十日と手を休めたら、この都會は、火の消えたやうになつてしまふのだ。なんで、自分から、意氣地ねえ考へを起すんだ。勞働者は、都會の

世界に沒した、記憶を呼び醒ます役目をつとめるのでした。

『お里さんは、どうしたらう……』

田舍の工場にゐる時分、仲よしであつた。苦勞をしつゞけたお里は、彼女が、こちらで家を持つた頃、賴つて來てある所へ奉公したのであるが、一日、荷物を抱いて勝手口からはいつて來ました。顏の色が惡かつた。

『心臟病なもんだから、暇をもらつて來たの』

『これから、どうするつもり……』

『叔母さんの所へ行きます』

それぎり、音沙汰がない。どうしたらうと思ひ出したのです。

音は、近くから、また遠くから來て、この窓を叩くのもあつた。

その遠くから來るのは、子供や、夫が、その下で眠つてゐる。寺の墓場の上を越えて來るやうな氣がした。

偶然、お近さんの白い幻が眼さきに浮ぶ。彼女は、覺えず、針を動かす指を止めて、

顏を上げました。

あまりに、はつきりと白い顏が、笑ふのを見たからだ……』しかしたゞ晩方になりつゝあつた、日の力を窓の上に感じたばかりでした。

彼女が、小料理屋に、下働きをしてゐた時分、お近さんは女中をしてゐた。藝者上りのもういゝ年增だつたが、後で聞くと肺を患つて、慈善病院で死んだといふことです。

昨日も、今日も、かうして坐つて、巷で起る音を、すべて過ぎ去つた者が、自分に話しかけてくれる。唯一の樂しみとして、項垂れて聞いてゐました。

そして、かく半生を虐げられた、彼女の望みは何んであつたらう！　たま〳〵少しの暇を見はからつて、子供等と夫の墓にお詣りすることだつた。稀には寺の境內へはいらずに垣の外から拜んで去ることもある。

歸りに、白い道を見詰て、歩みながら、僅か一坪の地でも、安定の床として、眠られる日の幸福を希つたのでした。

年が、人群の中で、夕刊を賣つてゐます。ごう〳〵といふ音に振り向くと、先刻、佇んでゐたガードの上と、客を滿載して、電車がつながつて通るのでした。

作家としての問題

もし、その作家が、眞實であるならば、どんな小さなものでも、また、どんな力ないものでも、これを無視しようとは思はないでありませう。

個人は、集團に屬するのが本當だといふやうなことから、なんでも、集團的に、階級的に見ようとするのは、この人生は、常に、唯物的に闘爭しつゝあるといふ見解のもとに、疑ひを抱かない、肯定的な議論であります。社會科學としては、それも重きをなす學說にちがひありません。そして、それを信ずることは、その人の勝手です。しかし、藝術には、その他の場合があるばかりでなく、藝術本來の精神は、もつと自由なものであり、その自由の敎化に於てこそ存在の理由があるのだと思ひます。

政治に於ては、黨派によつて、敵味方に分れてゐますが、藝術は、そんな不自由なものでない。自から不自由の軌範の中に立ち籠つて、政治の前衞をもつて任ずるもの

は、自から異ひますが、なるべく、多くの異彩ある作家が輩出して、都會を、農村をいろ〳〵の眼で見、描寫しなければならぬと思ひます。

作家は、何ものにも囚はれてはなりません。もし、囚はれた時は、自由人でありません。さなきだに、今の作家は容易に自由人たることを許されてゐない。藝術家が、精神の自由を得なかつた時は、もう死んだも同じやうなものです。

この故に、藝術家たり、作家たることは容易でありません。たとへ學說や主義に囚はれなくとも、資本主義の重壓に堪へることは、より以上に困難な時代であるからです。

いまこゝでは、資本家等の經營する職業雜誌が、大衆向きといふスローガンを掲げることの誤謬であり、また、この時代に追從しなければならぬ作家等が、資本家の意志を迎へて、いつしか眞の藝術を忘れるに至つたことを指摘しようと思ひます。

先づ、藝術は、眞の敎化でなければならないことです。眞實にものを見た作家の叫びでなければならないことです。實に、その藝術が、かゝる眞實の表現であつたら必

ずや、その聞かうとするものがあるを當然とします、もし、藝術が眞の發見であり、創意であり、作家の熱烈なる要求であることの代りに、通俗への合流に過ぎぬとしたら、何の敎化といふこともないでありませう。

藝術は、凡俗生活に對する反抗からはじまつたと見るべきが本當であります。今日の文化が、兎も角もこゝまで至つたのには、この向上生活のいたした集積ともいふべきです。政治に依る强權は、一夜にして、社會の組織を一新することができるでありませう。しかし、一夜に人間を改造することはできない。人間を改造するものは、良心の陶冶に依るものです。藝術の使命が、宗敎や、敎育と、相待つてこゝに目的を有するのは言ふまでもないことです。

一人の心から、他の心へ、一人の良心から、他の良心へと波動を打つて、民衆の中にはひつて行くものが、眞の藝術です。そこに、精神の自由の下に、人格の改善が行はれます。彼等はそれによつて、藝術的、社會革新の信念を得ようとします。同じ人類の理想、思想の下に結合しようとします。それが最初少數の信者であつたにして

も、その熱意の存するかぎり、永久に働きかけるものです。眞の藝術の强味はこゝにあります。藝術戰線の戰士は、すべからくこの信念に生きなければならぬものです。

都會に、多くの作家があり、農村に多くの作家があるべき筈である。そして、彼等は、各の接觸するところのものを眞實に描かなければならぬ。そして、時に彼等の代辯となり、時に彼等の忠言者たらなければならぬものである。これを稱して、私は、大衆作家と言ひ、或は民衆作家とも呼ばうとします。

しかるに、今日は、『大衆に向くものを』といふ意圖のもとに文藝が創作されつゝあります。

いつたい誰に、それが賣れないのであるか？　或は、さういふ作品は、誰に讀まれないといふのか？

過去のいかなる時代に於ても、眞の藝術は理解する人達にしか求められなかつた。それは、むしろ自然であります。さう一人の作家が多くの讀者を有するものでなく、また、さう眞面目な藝術が多くの人々に容易に理解されるものでもないのは、不思議

ではありません。言ひ換へれば、このためにこそ文化機關の必要があると言へるのです。

卑近の例を取つて言へば、民衆を教育せんがために、多くの學校は建てられたのである。教育といふことが、何よりも第一の目的たることを疑はない。しかるに、教化といふものが第二であり、第一にそれ等の經營者が營利を目的とするとしたら何うでありませうか。もはや、そこには、教育の精神も教化の精神も、死んでしまつたと言はなければなりません。民衆教化の精神を失つた藝術は、眞の藝術ではない筈です。

自由競爭時代の文化機關には、まだこの良心があつたが故に、各の異彩ある作家は自己の作品を自由に發表することができたのであつたが、今日は、『大衆に向くものを』といふ資本家の意志によつて、全く職業的に作家は書く以外の自由を有しないのであります。

これは、一面に、讀者層の中心がこれまで知識階級であり、その批判もまた知識階級によつてなされたがためであるが、今日の批判は、多數の無知識階級であり、その

ためには、彼等に分り易く書かなければならぬといふのであります。

多くの大衆作家が、また、さう思つてゐるらしい。そして、常識にまで、藝術を低下することを意としないらしい。むしろそれが時勢に適應することだと思つてゐらしい。

少し作家的反省と自負とがあるならば、これは、單に、資本家の意圖にしかすぎないことを知るのである。眞の大衆は、最も彼等の生活に親しみのある。いろ〳〵な眞實の言葉を聞かうと欲するにちがひない。常識にまで低下して、何等の詩なく、感激なき作品が、たゞ面白いといふだけで、また取りつき易いといふだけでは、彼等と雖も、決して、これをいゝとは思つてゐないであらう。また、たとひ、それに何が書かれてゐようと、すでに精神に於て、民衆を教化するとは言へなからうと思ひます。

これまでの大衆文藝がそれであり、また、機械的に政治と合流せんとする大衆文藝も同じでありませう。これ故に、今日以後、眞の作家たらんとする者は、いづれより解放された新人でなければならない。特に、今日の資本主義に反抗して、藝術を本

來の地位に歸す戰士でなければなりません。かゝる藝術の受難時代が、いつまでつゞくか分りませんが。考へやうによつて、アムビシャスな作家には、興味ある時代であります。

知ると味ふの問題

現在より、將來へと時勢は變遷する。この人間生活の推移といふものは、必ずしもそれが進歩を意味しない。最近では、機械が發明されるたびに、我等の生活形態が著るしく變るのであるが、新しい機械の發明は、科學の進歩した結果に相違ないけれど、これによつて、人間の生活が、常に定理を辿つて、進歩して行くとはかぎりないのであります。

大抵の場合、ある機械の發明といふものは、いまゝで、人間自身の力によつてなしつゝあつた事をば、機械がこれに代つてするといふのであります。そして人造人間の出現が、やがて、人間の仕事をいよ〳〵奪つてしまふのでないかと、杞憂するやうに實に人造人間のごときは、現代での科學的發明の極致でありませう。

なぜ科學が、かういふやうな、人間の仕事を奪ふ方面にばかり發達するかといふこ

とにも、理由がなければならぬが、それよりも科學の發達は、それ自らの進歩を明かに、物語るけれど、これを見て、眞に、人間生活が正しい向上を意味する、進歩の段階にあるといふことは早計です。

なぜなら、實用と情味とは一致せざること多く、知ると味はふの相違がそこに存することを知らなければなりません。

たとへば、ラヂオの發明によつて、私達は外國の知らない人と、顔を見ずに話すことができる。これが大衆化されるに至つて、どれ程便利であるかわかりません。しかし、さうした機械が發明されたことから、これをいろ〳〵な方面にも應用しようとする。そして知らせるといふことだけがその目的であるなら、完全にその役目を果すでありませう。しかし、教化の方面にまで、この機械を應用しようとする。こゝに根本的な矛盾を生ずるに至るのであります。

ある時には、かうした變則な應用も仕方がないであらうけれど、これを濫用するがために、眞の教化機關まで破壞し、消滅させる結果を來すことは眞の進歩の上から問

題たるべきものです。資本主義の世の中にては、たゞ經濟的といふことから、また支配上の統一目的から、また特權階級の利益いふことから、それと知りつゝも矛盾を押切つてしまひます。

大衆に呼びかけるといふ名目で、或は、大衆にとつて利益であるからといふ理由で、すべてが物質的見解を基礎としたスローガンの下に人間を機械化して、眞の人生を顧みないのであります。ちやうどある種の社會主義者が、階級的に何事をも見、かつ解釋して機械主義的に解釋をはかると同一の理由です。

何事も政治的に、また經濟的に見るならば、かうあるのが當然であるかも知れません。そして、今日の浮薄な大衆文化は、必然に招致された結果であるかも知れません。けれど、この推移に對して首肯するものと雖も、この眞實性と情味に乏しい今日の文化を目して、人間の進歩とはいへないであらうと思ひます。

また、ラヂオに例をとるが、なぜならラヂオこそは、今日では最も時代を象徴した大衆的な文化機關であるから、これの利害得失を嚴正に批判することは、卽ち、今日

の文化の批判となるからです。

これを知るといふことのみの機關としたら、朝の體操とか、料理の方法とか、もしくは、語學の發音とか、天氣豫報、ニュース等々の事項は、これだけでも足れりとされるけれど、もしそれが教化、趣味、藝術等に關する場合に於ては、知ることより、味はふことを主とするものなるが故に、萬能の力なき機械にては、その効果の幾何たるかを疑はなければなりません。

一言すれば、いまだ限られたる性能しか有せざる機械に對して、複雜なるべき人生の問題を取扱ふ役目を託し、却て資本主義的能力をもつて、人間をその機械に隷屬せしめることによつて、傳統ある文化を破壞しつゝあるのであります。

かりに修養訓話や、落語や、少くも藝術に關連するものを、ラヂオで聞いただけで果して深い、人間的な感銘が受けられるであらうか。聞くことも重要なる要素たるにちがひないが、他に見ること接すること等によつて、人間的な感觸が得られるのである。この人間的接觸の上に釀さるべき情味と教化を、單に聞くだけの變則によぎなく

せしむるのは、要するに、大衆を機械に、階級的機關に、隷屬せしむることになるのであります。

江戸文化の名殘である寄席は、民衆藝術の一つであつたにちがひない。そこで話される筋よりも氣分において、また、昔のお伽噺にしても同じであります。おぢいさんおばあさんから、きいたものは、なぜいつまでも感銘が殘つてゐるか。このことは、人格の接觸といふ事實を他にしては、考へられないことです。

文字による表現には、人格を打ち込むことができる。讀者は、文字を通じて、永久にその作家の人格を偲び得るでありませう。師がその弟子達に道を說く時、面接して聲涙共に下る間に、彼等に眞の敎訓はなされたのであつた。誰か、今日の學校敎育に比して、昔の寺小屋は及ばなかつたといふものがありませう。少くも、昔は精神を生かしてゐる。

手工藝時代の製作には、織物、陶器、銅器、木工等に至るまで、作者の人格は、偲ばれたのであります。これ等のものにこそ、人間的なるものが感ぜられたのである。

單に實用としてゞなく、そこに人と人との接觸から來る情味があつたのであります。

今日の資本主義文化は、大量の搾取を目的とする以外に考へぬが故に、すべてを機械化することによつて、この種の藝術をも滅ぼしてしまつたのです。トーキーから受けるものは、畢竟、寫眞の感じにしかすぎません。ものを知り、傳へるといふ上からは、ラヂオもトーキーも、その役割は、大きいけれど、味はふといふ點においては、機械文化特有の美を他にしては、所詮、いまゝでの藝術的表現に及ばないものがあります。智情の兩者が、調和してこそ、そして、發達した時においてのみこそ、眞の進歩は豫想されるけれど、兩者の調和を缺き、その一つのみが發達した時、そこに構成されたる文化は、却て、人間生活の退歩を意味するものであるまいか。卽ち、人間的接觸より生ずる情味なくばいかなる詩も、藝術も情熱を有しなければ、從つて、眞の敎化もあり得ないでありませう。現代は、まさに、知ることに過ぎて、味はふことに缺けてゐると思はれます。

雷動と反動の激化

マルクス主義的理論に從へば、革命は、英國のやうな、最も資本主義の發達して、爛熟した國家に早く來なければならぬ筈であつた。そして、ロシアのやうな、文化の遲れた國には、容易に來さうもない筈であるが、それが、全く反對であつたことは、何を物語であらうか。

人間の造りつゝある社會といふものは、單に物質的關係ばかりを重要とするのでない。それを物質的關係卽ち經濟的關係とばかり見ることに誤りがあるのでないか。もし、これが全くその通りのものであつたら、そして、精神的方面を、卽ち、良心、本能、感情等のものを認めなかつたら、成程、科學的社會主義の結論は正しかつたかも知れぬ。しかし何れの國家も、同一の環境、もしくは、事情に置かれて統制されてゐないのは事實だ。從つて其處に生存する人間の心の持方や、感じ方といふものにも相違

がある。ロシアのやうに、過去に於て、壓制暴虐の治下にあつたとしたら、死を賭しても人々は自由を欲したであらう。しかし、さうでなく、英國のやうな、比較的理解のある國柄では、たとへ、よりよい社會への向上を欲しても、やはり、その方法も理性的に、そして、流血を厭ふことは、むしろ自然とすべきである。

ロシアは、特種的の狀態にあつた。そして、革命に成功したといつていゝ。その結果については、批評すべき多くを持つけれど、兎に角、これによつて、世界は、社會主義的國家の出現を見たのである。思ふに、ロシアのやうな大國であり、そして、無智の民衆が過半を占めるからこゝまでに至つたのであるが、これがもつと文化の進んだ、自覺心の强い國民であり、同時に、有する資源も自立に耐える國であつたり、ロシアのやうに、一黨の强權下に、容易に服しないばかりでなく、また周圍の資本主義國家から經濟封鎖に遇つて、どうすることもできなかつたであらう。

革命は、單に、理論だけで遂行出來るものでない。それこそ、民衆全體の創造を伴つた、本能の爆發でないかぎりいかなる苦難に遭遇しても、喜びをもつて、新社會を

建設することは、できないのである。しからば、いかにして、ロシアと事情の一致しない日本に於て、あのやうに、獨り、マルクス主義のみが喧傳せられたであらうか？

それには、他に原因もあらうが、社會批評が、デヤナリズムの上にあつたことを重なる理由とすべきである。批評家等は、かならずしも、眞理のために戰ふ人々ではなかつた。いたづらに、時好に雷同し、いたづらに煽動し、自からは、智識にて、文筆にて生活する都合上、デヤナリズムと歩調を合せなければならぬものがあつた。

學者は、また、至誠な、人格の高い人々ばかりといふことはできない、中には、人氣取りもあれば、いろ〳〵不純な考へを持つものもあつたであらう。要するに純粹な信念の上に立つてゐるなら、かうした運動を、社會に於ても認めなければならぬ。同時に、他の主義、學流の存在も容認さるべきだ。そして、異なれる觀點に立つ人々の熱烈なる理論、鬪爭、眞摯なる運動の繼續によつて、その社會は、無限に進化の過程をたどるともいへる。

しかるに、私は、有名の學者にして、公正な立場から批判し、熱烈に、暴力革命の理論に對し、また、さうした運動を胚胎した社會と戰つたものを、あまり聞かなかつた。時に、反對するものも、等しく感情的であり、徒らに挑戰的であつた。これマルクス主義者が、自家の理論を無二の眞理と揚言するに至つた所以である。

社會改造に關する理論のごときは、苟くもデヤナリズムの主題たるべき性質のものでない。その如何にかゝはらず、對象は、その國家であり、民衆の死活である。眞に信念より發するものは、別として、附和雷同する批評家、煽動家のごときは、たとへ、その言ふところにさまで人心を感激するに價するものなしとしても、聲を大にすることによつて相手の眞面目なる主張を打消してしまふだけの役割を果してゐる。これがために、マルクスシズムを除いて、他の主義、學說は、一時的なりとも、光彩を失し終熄したやうにさへ見られた。殊に、さうした感じを、多くの學生に抱かしめたのである。

すでに、情勢然りとすれば、正直で、眞理を愛する青年達が相率いてこれに趣いた

ことを不思議としない。もし、こゝに誤りがあつたとすれば、それは、指導した者になければならぬ。即ち、社會革命の理論を、ヂヤナリズム化しかゝる問題を、資本主義下に於て商品化したものゝ罪である。そして、眞の革命家の興り知るところでない。

人間の生活が、マルクス主義だけによつて解決さるものとは考へてゐない。しかしマルキシストの擧げるやうな社會的罪惡は、この社會に滿ちてゐる、このことは、先づ、社會自から、その責を負はなければならぬものだ。社會に於ける殊に上層階級が、罪過を絕たないかぎり、赤化の素因を纖滅することはできない。

公正なる批判は、常に、眞理を軌道とする社會にとつて必要である。この際、支配階級が、徒らに反動的なることは、却つて、其の國家を危くするものだ、なぜなれば人間的理解を無視して、階級的對立を、彼等自から、雄辯に實證することゝなるからである。

婦人、兒童雜誌の現狀批判と將來

高度資本主義の現象として、すべての產業の上に、統制的傾向の見られるのは、當然であらう。これを產業の合理化と名づけてゐる。しかし、これは、實用品にかぎることであつて、根本に、敎化機關たることの使命を帶びなければならぬ、雜誌については、言はれないことだ、極めて卑近な、畫報ものゝやうな、眼に訴ふるそれ以外に、目的を有しないやうなものには、大衆性が、許容されるけれど、思想に訴へ意識に呼びかけるやうな、書かれた事柄を主とする雜誌にあつては、所謂、各生活層を通ずるやうな、大衆性について考へることができない。

器具や、その他の物品に於ては、何人を問はず用途を一にする關係上、大衆を目あてとして、多量生產を資本の許すがまゝに、企てんとすれば、することができるであらう。しかし文藝の上に於てはさうはいかない。生活層の異なるにつれ、また、その

人の性格に從つて、趣味を異にし、思想を異にする、そして、階級的には、一言にして有產、無產といふやうに、經濟上の原則を基礎としてかりに、これを區別することはできるけれど、內的生活に至つては、ます〳〵複雜になり行くばかりである。それが、また、一面から言へば、さうなくてはならぬのだ。なぜなら、外的事件を良心上の問題として時には、幾多の懷疑、反省、思考が、費される、それによつて、人生は進化し、改善されるからである。

故に、敎化機關としての雜誌が、實利一點張りの商人の手によつて、編輯されずに智識人の手によつて、編輯されて來たことに理由がなければならぬ。一定の批判なく人生に對する良心なく、思考なくして、たゞ民衆を欺くことは、許されないであらう。

しかるに、雜誌が、全く商人の魂と手によつて編輯される時代が來た。いつの間にか眞理のためにつくす、犧牲的信條は無視されて、返つて、かゝる思想を抱くことは、時代に後れたるものとして、すべての價値を物質の上にて換算するに至つた。こゝに、

近代出版界の奇形的な發展があり、文筆業者の墮落があるといへる。

試みに、多量部數を、發刊することを誇りとせる、二三の婦人雜誌について、その內容を檢討し見よ。果して、そこに、いかなる主義があり。眞に、それに價する、集積されたる努力があつたらうか。婦人雜誌なるにかゝはらず、何等積極的に婦人の味方となり、眞の血となり、肉となるやうな、役立つ記事が載つてゐない。所謂、實話にしてもその生活記錄にしてもそれは肅然として世間に訴へるものがあり、また、それによつて、弱き者の代辯となるといふよりは、むしろ、事實を興味化することによつて、異性の好奇心を惹かんとするやうな、挑發的のものでなければ、美容術とか、衣物の流行とか、大部分は、有閑婦人にとつてのみ、必要とされるやうなものばかりである。そして、この種の記事を補ふのに、卑俗な挿繪をもつてしてゐる。全幅エロチズムとブルジョア趣味の橫溢たらざるはないのである。歷史を見ても、行詰つた時代には、健全性を缺き、享樂的になるのを例とする。今日はまさしく、さういつた時代ではないだらうか。古き一切の文化は權威を失墜した。新文化は、いまだ生成の過程

にある。そして、今日の生活を支配するに足る何物もない。たゞ、この混亂の中にも自から、一脈の辿るべき道が覗はれないのでない。少なくも、その指導の任に當るものは批判的であり、誠實なる智識階級なのだ。そして、新聞や、雜誌は、そのために、最善の責務をつくさなければならぬ立場にある。それだのに、却つて、彼等は、誤れる使用のために、一層、風俗を亂し、道德を頽廢し、節操を輕んぜしめるに至つた。誰か、その罪の大半を、今日の大衆的文藝及び雜誌に歸するを、敢て不當とするものがあらうか。

この種に屬する婦人雜誌は、何等、堅實なる思想と確乎たる見地の下に、編輯されてゐない。卽ち、新文化を建設することを思念として、協力的に、その役割を果すといふ良心によつて經營されてゐない。されば、女性といふものを認識して、有識婦人のために、もしくは無識勞働婦人のために、特種的な事情を考察して、はつきりとした意圖のもとに、啓發と援助のために、其の雜誌が、發刊されてゐるのでない。漫然として、各階級を通じて、女の喜びさうな、また知りたさうな、そればかりでなく、

女性の秘密を暴露することが、女性同志の間に於けるよりは、より一層、男性の低級な趣味に適ふといふことを知つて、かゝる計畫の下に、いろ〳〵な記事の蒐集がなされてゐる。寫眞も、挿繪も、その目的を達するために、有力な材料であることは、一見して分るのである。

曾て、思想だけが、讀者階級に働きかけた時には、作家に自責があり、自負があつた。そのために、作家や、思想家達は、良心の命ずるところなくしては、筆を採ることができなかつたものだ。それが、今は、さうでない。雜誌は、眞實なる思想を要求するのでなく、また、與へることを目的とするのでなく、純然たる商品として、產業の一部隊として、完全に、資本主義の下に隷屬してしまつた。思想に立たなければならぬ、敎化機關として、間違ひであることは、言ふまでもないが、現在、かくのごとき形態を取りつゝある以上、この事實を否定することはできないのだ。

資本家獨裁は、編輯者に對して、理解なしに命令する。彼等は、自らの自由を持たず、たゞ機械のごとく動く。そして、いかにして、多く賣れるやうにすべきかと會議

に與る。文筆業者は、またこれに關して何の權利を持たない。賃金制度に依れる、一般自由勞働者と何等異なるところなく、たま〳〵、投げ與へられたる題目によつて、資本家の意圖を損はぬやうに書くに過ぎないのである。もはや、文筆家としての自負も權利も、その人達にとつては、主張する餘裕もなく、意氣もないのである。

かゝる結果からして、多くの婦人雜誌は、獨り、婦人雜誌にかぎらず、その他の文藝雜誌に於ても、この頃は、玄人の書くものは面白くないといつて、素人のものを歡迎してゐる。卽ち、多年文筆業者の思想表現と生活經濟のために、解放され、その人達の壇場であつたものが、一片の警告すら受けることなく、いまや、追ひ拂はれて、失業の慘苦を見んとしつゝある。これ一に、文筆業者に、確個として相互扶助の組合すらなく、自身、その時勢に處することを怠つた、結果のいたすところとはいへ、過去多年精神文化に貢献し來たれる。傳統までを無視する横暴の誹は、資本家になければならぬ。

尙ほ、文筆を專門とする士の中には、良心に立つものがないのでないか。苟くも、

思想家と稱せられ、作家と言はるゝ、人でありながら、いかに、生活のためとはいへ、また、時代が混沌と歩みつゝあるからとはいひ、かの店頭に身柄を賣る、マネキンに等しく、專門ならざる、いかなる題目にも名前を列し、座談會に、顏を並べで、心にもなきことをしやべりつゝある有樣を見れば、文筆業者、自から、その地位を低下しつゝありとも言へるであらう。

要するに、それ等の雜誌が、たとへ、多量に發刊したとしても、畢竟、空中樓閣を築くに他ならない。なぜなら、それによつて、享樂趣味をそゝり、風俗を輕佻ならしめることに役立つても、何等、その時代に積極的に文化を建設するものでないからだ。また、經營者は、それによつて利得し、宏莊なる建物を街頭に築かうとも、それを誰の前に、誇りとすることができやう。今日、政治的に、經濟的に行詰ればこそ、庶民生活は、指標を失つてゐるのだけれど、やがて、新人の努力に依つて、それは、轉回され、憂欝が打破される時が來るにちがひない。その時、目醒めたる大衆は、もはや今日のこれ等の卑俗な雜誌を相手にするものはないであらう。現に、その徵候は見え

てゐる。高邁な歩みをつゞけてゐる少數の雜誌が、自覺ある、一部の人々に依つて支持されてゐることこれである。

試みに思へ。是等、俗惡なる大衆雜誌、婦人雜誌等々が、資本力に委せて、卑俗低劣な記事を羞恥心なく、しかも、挑發的な繪入等で、大々的に廣告をするのでなかつたら、僅かに二、三ケ月で、その雜誌の存在的印象は、衆人の頭から失はれてしまふことを。

これに反して、常に、批判的に、思考的に、確實なる認識から出發して、或は、勞働婦人に、或は勤勞階級の有識婦人に、その教養と理解とを啓發に供すべく、眞の文化的意圖より編輯されたる雜誌は、今後、不利の關係を保ち、必ずや、ます〳〵その存在の理由と印象を明かにするであらう。また、さうあるべきが當然なのだ。

いかなる雜誌を愛讀しつゝあるかによつて私は、その婦人の思想を知り、人格を知り、また、教養を知ることができる。併せて、次の時代に生き行く人と、時代と共に滅落する人とを分つことができるだらう。

ボリシエヴイズムも、アメリカニズムも、淺薄に、ヂヤナリズム化せられることによつて、その價値は、卓上一杯のカクテルを出ない、日本の皮相的文化の弊は、常にかうしたところにある。しかし、それだけで濟まされる時代は去つた。そして、本當に、思想の上にも、經濟の上にも、行詰りが來たのだ。いま、この打開に向つて、自ら責任を負ふことを知る人々の努力は傾けられつゝある。かくて將來に清楚な姿を映出する、新社會の微光を地平線に見るのも時間の問題だ。たゞ、それは、堅實不撓の努力を措いて、他に達する途のないことだけは言ひ得るのである。そして、將來の雜誌が、それが指導的の立場に立ち、それ〴〵、各生活層によつて胎生する思想のいかなるものかを感得することにより、教化するであらうことも明言出來るのである。

ある意味に於て、階級的觀念もなく、たゞ多量に生產する雜誌は、それだけ、存在的に、不安なものがある。なぜなれば、かく存在するために、絕えざる大衆への機嫌とりと、阿諛と妥協と、そして、欺滿がなければならないからだ。

以上、概括的ではあるが、婦人雜誌の現狀と、將來への動向について述べたつもり

だ。次に、兒童文學に對して、所感を述べることゝする。

こゝにも、兒童等にとつて、いゝ讀物のないといふこと、いゝ雜誌のないといふことが、同樣に、現代の社會が、兒童等に對して、いかに不親切であるかを實證するのである。なぜといへば、小さき者達は、常に、受動的の地位に置かれてゐるからだ。そして、與へられたるものより、以外に自ら撰ぶ力を有さないからだ。

彼等に、科學的のものを與へなければならぬといふ。指導者等の言葉に對して、誰も、反對の意見を有するものはないだらう。しかし、それは、動物や、植物や、礦物等に關る記事だけが、卽ち科學的で、ある、といふのでないだらう、兒童等が、その中でも、最も興味をもつて讀むところの童話や、物語や、小說等のものにも、科學的な批判を要するといふのであらう。

しかるに、それ等の少年、少女雜誌の中に收められたる童話や、物語や、立志傳といふものは、果して、どれ程まで作家の認識と思考と藝術的良心の成果であるかを疑はずにすまされるだらうか。

一言もつてすれば、それ等の多くは、荒唐無稽のものと評することができる。編輯者は、兒童等に希望を持たしめ、勇氣づけ面白く明るいものといふ條件の下に、それ等の作品を蒐集る、しかし、彼等の言ふ、希望あるもの、面白いもの明るいものは、いつたい、如何なるものか、何等、現實に對する認識と、批判の後に來るところのそれでない。たゞ、在來の通俗的な意味に於ける、面白さであり、勇氣である。さればいま今日でも、昔日の如く、苦學、忍耐、克己することによつて、貧乏人も、大金持や、大臣になれるといふやうな立志傳である。そして、いつも、正直なものには神の加護があつて、最後に成功するといふ冒險談である。これまでの道德を、そのまゝ、人生の正しい信條として、いかなる話の上にも托して、兒童等の性情に强壓を加へることに他ならない。かくすることによつて、この時代の繼承者は、文字通り、舊文化を永遠に擁護して、柔順善良な人となるであらうといふ考へを持つごとくであるらしい。

この考へ方の時代錯誤であることは、婦人雜誌の場合に於けると少しも異ならない

のである、彼等自らが、文化の指導的役割を持つべきにかゝはらず、眞の理想を有せず、開拓の誠意を有せず、俗流と戰はず、常に、その時代の支配階級の機嫌を損せざるやうにつとめる所以のものは、いかに、大衆を好餌を以て釣り、欺瞞して、多量生産することによつて、金儲けをせんかとする以外に、目的を有しないためである。

是等の不健全の雜誌の存在こそ、時代の進化を阻害するものだ。もしその時代の文藝が、正當な役割を果したなら、時勢の轉向をいかばかり滑かにするか知らない。文藝が、その力によつて、新時代の機運を釀成し、理解の上に進化を招集せざるかぎり政治的、經濟的の强權的革命は必然とされるのである。

さなきだに、將來の社會の素描は、誠實なる作家に朧ろげながら、眼に映つて、ゐなければならぬ。その新社會の構成分子として、兒童等に讀ましめるものは、また、いかなる文藝であるかを知らなければならぬ。しかるに、この種の作品は一切、商品雜誌には、拒否されてゐる。理由は、商品とするには、あまりに藝術的で不向だといふのだ。

かくのごとく、多量發刊を企圖しつゝある雜誌の、形態は、成人、兒童、いかやうに異つても、畢竟同一廢頽期的センチメンタリズムに立脚してゐる。文章に挿繪に現世主義を高潮することによつて、衆俗の興味を捕へやうとする一方、廣告宣傳と廉價とを看板にせざるものはないのだ。しかし、これも、また過渡的現象たるにすぎない。やがて、彼等、ルンペン讀者の生活が、滅落すると前後して影のうすれ行く運命に置かれてゐるであらう。

さらば、將來の雜誌とは、いかなるものであらうか。案ずるに、すでに、男女共學を常識とせる今日、特に、男性、女性の區別を重視したにちがひない。そして、綜合雜誌は、一樣に、兩性共通のものとならう。たゞ、專問雜誌に於ては、もとより、多數を考へない、故に、對象を忠實に意識して、いゝ雜誌を造ることにつとめる。そして婦人雜誌にあつては、職業別に、もしくは、農村と都市に、階級別に、さういふやうに、生活と環境を基礎とすることによつて、特種的な編輯をされるであらう。それでなければ、眞に、その種の婦人のための援助にも、代辯にも、また向上にも役立つと

ろこが少ないからである。

兒童の雜誌は、その作家にして、兒童に對する關心より、また、情熱より創作されたる文藝作品にして、はじめて情操敎化に缺くべからざる所以を反省することによつて、新兒童文藝の興起を促すに至ることを確信する。そして、それは、遠い未來のことではないのだ。

三階のお婆さん

都會のまんなか程に、高い建物がありました。そのなかには、いろ〳〵の人が、間を借りて住んでゐましたが、三階目の一室に、外國から來たお婆さんが、ひとりで住んでゐました。

お婆さんは、もう長らくの間、學校の先生をしてゐました。自分の室にゐる時は眼鏡をかけて、ミシンで何か縫つたり、また、タイプライターをたゝいたりしてゐました。そして、お客といつても、稀にしか、たづねて來なかつたけれど、お婆さんは、本を讀んだり、仕事をしたりして、靜かに平和な日を送つてゐました。

ある日のことです。お婆さんは、何か用事があつて室から下へ降りて、建物を出ると、にぎやかな街の方へと歩いて行きました。

ちやうど、のどかな春の日の午後で、往來の上には、ほこ〳〵と日が當つて、人や

車の影が、目まぐるしい程、働いてゐました。すると、この中を、赤い旗を背中にさして、あやしな風をした支那人が、小さな四角なかばんをかついで、何か言ひながらやつて來ました。人々は、なんであらうと、その姿を見送りましたが、支那語だつたので、その意味は分りませんでした。なかに、分つたやうな人は、にや〳〵笑つて行つてしまひました。

この支那人は、お婆さんの前まで來ると、急に足をとめたのです。そして、

『お婆さん、人魚の肉を買つて下さいな』と、言ひました。

支那語で言つたのでしたけれど、お婆さんは、若い時分から、いろ〳〵な國の言葉を學びましたので、そのいふことが分つたばかりでなく、『人魚』といふ、言葉を聞いて、非常になつかしがりました。自分が、この遠い、東の國に、あこがれて來たのもひとつは、人魚の棲む島を見たいといふ望みもあつたと思はれたのです。

『人魚の肉？』と、言つて、お婆さんは、眼をまるく見はりました。

この時、支那人は、早口に鳥のさへづるやうな調子で、

『うそでありません、ほんたうの、人魚の肉でございますよ。ずつと南の島で、捕れた人魚の肉です。これを食べると、長生がされます。何年たつても腐りはいたしません。しまつて置いて藥になります。めつたに、手にはひらない人魚の肉を買つて下さいな』と、お婆さんに言ひました。

お婆さんは、この頃、眼がかすんで、仕方がありませんでした。達者だつたら、これから、南洋へも行つて見たいと思つてゐました。また、キリスト様の生れた國へも、お釋迦様の生れた國へも、支那人の言つた、人魚の棲んでゐる南の島へも行つて見たかつたのです。しかし、寄る年には、かなはなかつた。もつと若ければと思つてゐたのであります。子供の時分から、人魚の肉を食べたものは、百年も、二百年も、生きるといふ話をきいてゐました。いま、その珍しい人魚の肉が手にはひると思ふと、一時は、びつくりもし、また、疑ひもしましたが、支那人が、まことやかに言ふので、南方の不思議な綠色の海原が目に浮ぶと同時に、とうたう信じてしまつて、

『それなら少しばかりください』と、言ひました。

支那人はかばんをおろして、鍵をはづして開けるとくん製にされた、人魚の肉が大切さうに、綿の中につゝまれてはひつてゐました。支那人は、お婆さんの出した金を受取ると少しばかり、肉を切つて渡しました。

お婆さんは、それを大事にしまひました。支那人は、また、かばんをかついで、人ごみの中を歩いて、何かいひながら、だん〳〵とあちらへ遠ざかつてしまひました。

お婆さんは、それから用事をすまして、三階の室へと歸りを急いだのであります。

お婆さんは、元氣でしたが、自分の室へ戻ると、やれ〳〵と疲れを感じました。椅子に腰をかけて、眼鏡を直して、机の上にのつてゐる新聞を見たり、手紙を讀んだりした後で、支那人から買つた人魚の肉を取り出しました、

『どんな味のするものか、食べて見ませう。私も、もつと、元氣になつて、方々を旅行し、幾十年ぶりかで、故郷へも歸りたい。弟や、妹は、どうしてゐるだらうか、遇つて見たいものだ……』と、お婆さんは、思ひました。

お婆さんは、ナイフを出して、人魚の肉を削りました。そして、どんな味がするもの

のか、口にいれて舌打をしました。『これは、すこしばかり澁い、なる程、人間の肉といふものを、食べたことはないが、澁いといふ話を聞いてゐる。人魚は、人間に近いから、それで、人間の味がするのだらう……』と、お婆さんは、食べたのであります。

そのうちに、日は、暮れてしまひました。窓から、はひる風は、もう寒くはありませんでした。お婆さんは、電燈の下で仕事をしてゐた。だん〳〵街のどよめきも靜まつて、物音がきこえなくなると、どこからともなく、波の打ち寄せる音が聞えて來たのであります。ちやうど、この建物の窓の外が、一面に海原でゝもあるやうに思はれたのでした。

『はてな、私は、どこにゐるのだらう?』と、お婆さんは、頭を上げてあたりを見まはしました。

しかし、そこは、建物の内で、お婆さんは自分の室にゐることが、すぐに分りました。

『何、私の氣のせゐだつた』と、お婆さんは思つて、下を向いて仕事にかゝりますと
また、どこからともなく、ド、ド、ドーと、いつて波の打ち寄せる音が、聞えて來た
のであります。
『そんなことのあらう筈がない』と、つぶやいてお婆さんは、こんどは立上りまし
た。
自分の知らぬ間に、窓の外まで海になつてしまふやうなことは、ありやうがないと
考へられたけれど、お婆さんは、とにかく、窓の際まで行つて、外をのぞいて見ずに
ゐられませんでした。額を出すと、無數の星影のごとく街の灯はお婆さんの眼にうつ
りました。
『やはり、私の耳のせゐだつた』と、言つて、お婆さんは、もとの椅子にもどつて、
腰をかけました。そして、仕事にかゝりますと、また、波の音がどこからともなく聞
えて來たのであります。こんどは、お婆さんは、眼をとぢて、ぢつと、その波の音を
聞いてゐました。すると、過ぎ去つた日のことが、あり〳〵と浮んで、見えたのでし

た。——
誰でも、若い時分には、希望を持つやうに、お婆さんは東の國へ行つて見たいと、
あこがれたのであります。たとへば、支那や、印度や、日本や、また南の島國などを
空想に描いて、どうか一度行つて見たいと思ひました。象に乘つて、歩いたら美しい
日傘をさして歩いたら、と空想したばかりでなく眞珠や、珊瑚のとれる、人魚が棲ん
でゐるといふ南方の海の景色をば空想しました。そして、たうとう、太平洋の波を切つ
て、船に乘つて來た日のことが、あり〳〵と眼の前に、よみがへつたのであります。
『人魚の肉を食べたので、若くなつたのか知らん……』お婆さんは喜んで、その晩、
床の中にはひりました。床の中へはひつてからも、お婆さんは、うれしくてうれしく
て、すぐには、眠れませんでした。
あくる日の朝、お婆さんは、いつものごとく起きて、テーブルに向ひ、コーヒーを飲
みながら、新聞を見ました。その新聞には、支那人が、人魚の肉だと僞つて、何か魚
のくん製を賣つて歩いてゐるといふ記事が載つてゐました。

しかし、お婆さんは、それをほんたうの人魚の肉だと信じてゐます。自分は、たしかに、いくつか年が若くなり、急に、眼もかすまなくなつたやうな氣がして、今年の秋には、南洋へ渡り、そして、故郷へ歸らうと考へてゐました。

托鉢僧と蝶

それは夏の時分でありました。

殆んど隔日のやうに、晝過ごろになると、村へ托鉢にはいつて來る坊さんがありました。もう、お爺さんで、眉毛は白く身に黄の勝つた茶色の衣を着て、錫杖を鳴らしながら、戸口のところに立つてお經を上げたのであります。

ちやうど、その時刻には、家の内で仕事をしてゐたものは手を休めて晝寢をし、また外で働いてゐるものも、骨休みをして横になつてゐたので、あたりは靜かであつたのです。

いつも、絶え間なくおしやべりをしてゐる絲車までが、ひつそりとして、だまつてゐました。

『ホオー』と笠を目深くかむり、草鞋をはいた坊さんは、やがて太郎の家の前に立つ

たのであります。

蜻蛉を釣らうと、前の南瓜畑の中に、獨り佇んでゐた太郎はその坊さんの方を見てゐました。するとみんな晝寢をしてゐると思はれたのが、祖母さんだけが起きてゐたと見えて、戸口のところへ現はれました。

『あげますぜね』と、言つて小錢を鉢の中へ落す音が聞えたのでした。

たちまち、錫杖の先についてゐる輪をしきりに振りならす音がして、僧はしばらくお經を上げてゐる聲がしたのでありました。

やがて坊さんは、我が家の前から離れて、韮の花や、鳳仙花の花などの咲いてゐる桓根に添つて通り、隣の方へ行かうとするのでした。

太郎は、蜻蛉のことなどは忘れて、何となく頼りなさゝうなこの坊さんを見送りますと、いまゝで韮や鳳仙花にとまつて戯れてゐた胡蝶が、行き過ぎかゝつた坊さんの後を追つてゐるのを見たのであります。

『あゝ、蝶が、お坊さんをからかつてゐるやい』と、太郎は思はずにつこりしました。

街道筋にあつた、どこかの荒れた寺からでも、この坊さんは來たものと見えます。賑かな町へゆく、ついでに、橋を渡つてこの村へはいつて來たのでした。そしてしまひには太郎の家だけを一軒、目あてにしてはいつて來るやうになりました。

『村のものは、信神心がないのう、お坊様に誰も錢をあげる者がない、氣の毒な、わざ〳〵こゝまで遠廻りをしなさるのも私の家一軒きりだから私が留守でも忘れんで、あげておくれよ』とおばあさんは言ひました。

お坊さんの來る時分は、みんなが休みをしてゐました。この時分にも眠らずに外で遊んでゐるのは、子供達ばかりであります。他の子供は氣にもとめなかつたが、太郎は家で祖母がよくお坊さんの話をするので、遊んでゐても『ホオー』といふ聲をきくとその聲のする方に注意をしたのでした。

一軒一軒、戸口に立つて錫杖をならして歩いた坊さんはやがて太郎の家の前まで來ると、一段聲を高くして、

『ホオー』と言ひました。すると白髪頭のおばあさんの姿が戸口にあらはれました。

『さあ、あげますせね』と、言つて錢を鐵鉢の中に落す音が聞えました。

坊さんは、おばあさんの志をありがたく思つたのでありませう。そして、長くお經を讀んでゐました。佛樣のご利益をおばあさんに授けてもらふように祈つたのです。

おばあさんは、坊さんの心持がよく分りました。しかし燒けるやうな炎天の下に、いつまでも立つて、お經を上げてゐるのを見て氣の毒に思つたのでした。

『短くて、ようございます』と、言はれた。

坊さんは、それには耳をかさずにお經をあげて、しばらくして、そこを立去りました。

太郎は、坊さんが自分の家一軒を當にして來ること、雨が降つても必ず隔日目にやつて來ることに對して、何となく反感に近いものを感じたのです。それにもう一つ、笑ひもしない、また物も言はない坊さんをからかつてやらうといふ氣が起つたのでした。ある日、外に遊んでゐて、坊さんが、『ホオー』とやつて來ると、往來の上で、

『今日は、いゝですよ』と太郎は言ひました。坊さんは空しくあちらへ行きました。

太郎は後で笑つてゐました。

その次の時も、太郎は外に立つてゐました。するといつもの時刻になると、坊さんが、錫杖を鳴らして來かゝりました。

『いゝですよ』と太郎は坊さんの顏を見上げて言つたのです。

坊さんは相變らず、笑ひもしなければ物を云はなかつたが白い長い眉毛のあたりをぴくつかせて、ぢつと太郎の顏を見ていつてしまひました。この時、どこからか、白と黃の蝶が二疋飛んで來て、坊さんの身のまはりをかざしながらついて行きました。

『もう、あのお坊さんは來ないだらう……』と、太郎には思はれたのでした。

果して坊さんはまたとこの村へはいつて來ませんでした。

『どうして、この頃お見えにならないだらう』とおばあさんが言つた時、太郎は自分のした事を話した。

するとおばあさんは、

『錢がほしくてわざ〳〵一軒ゐらつしやるのでない。來なくては惡いと思つて、ゐら

しつたのだ』とし んみり云はれました。

いつしか、月日は流れてしまひました。太郎は大人となりました。いろ〳〵子供の時分の事が思ひ出されたのであるがその中で、一番惡い事をしたと後悔されたのは、半分からかふ氣で坊さんを歸した、あの時の事であつたのです。

『蝶がからかつてゐる』と云つて笑つたのも、いまやうやく其の理由が解つたのでした。——

坊さんが村へ入つて來るのには、田圃の細い道を通らなければなりません。そこには野薔薇の花が、雪のやうに白く咲き亂れてゐる。花の香りが、坊さんの衣の袖に移つてゐたからでした。いまも小道には、夏になると、野薔薇の花がいつぱい咲きます。

慌しい貸家と居住者の關係

貸家を轉々として、幾十年かを過した者には、それによつていかに時代が變遷し、社會的にも、生活の形態が變つたことを感ずるであらう。

眞の無產者は、故鄕を持たないばかりでなく、また家をも持たないのである。なかには金があつても、家を所有しない近代人もあるが、さういふ人達は、他にこれに代へるだけの自由も娛しみも持つてゐる何といつても、人は、自分の住むところの定まらない程、不幸は他にないのだ。

これ等の人達にとつて、ことに、都會生活者にとつて、幾坪かの狹い地面を氣儘に踏むといふことは、非常な喜びである。子供の時分に、街道を野原を、自由に驅けまはつた者が、年とつて、それが得られなくなつてから、家の周圍を歩くだけでも、なほ自然を慕ふ、この心は慰められたのだ、昔の借家生活には、それだけの餘裕があつ

た。草花の種子を蒔いても、春になれば綠色の空は見られ、太陽は、その花壇を照らした。

いつしか、地代の騰貴は、古い家を取り拂つて、その跡へ、幾軒か建てるやうになつた。かうして、もはや、草花を植ゑたり、冷たい地を朝晩、踏んで見るといふことは、その後の人にはできなくなつた。家を借りる人達の幸福が一つ減たのである。

どの家でも、長く住めば、その家が戀しくなる。そして、容易に他へ移りたくなくなるのが人情だ、それが、自分の所有であると否とを平常は意識にすら置かない。しかしそれは生活が、平穩な常態で家賃などの苦にならない時であるのは勿論だ。

そして、個人的に於てばかりでなく、社會的に、借家人の移動がはげしい時は、必ず、經濟的に變調のあつた時である。そのたびに、彼等に、住みなれた家から離れ、子供等は、親しい友達と別れなければならぬ。この時、はじめて自分達が、家を持たないといふことを痛感する。

今や、金融資本力の配下に、產業革命が行はれ、二軒や、三軒を貸家として所有す

る、中產者は用捨なく無產階級に沒落することも、實に近景といふべきだ、これに準じて、不拂の借家人は、增出する。その結果、家主は、いまさら、貸家業の時世に不向きになつたことを自覺して、だん〳〵に所有家屋を手放しする。しかし、民衆は、一日も住む處がなければならぬ。こゝに於て、大資本家によつて、貸家の統制がはかられる、將來のアパートの建設これである。そして、これが、借家人の生活にとつて、どういふ風に反映するだらうか？　思ふ、もはや、借家人と家主と顏を合せるやうなことは、恐らくないだらう、なぜなら、どういふ人が、借りるかを知る必要はない。一日も間代が滯つたら、差配をして、迫ひ出すまでだからだ、かうして、曾て、家主と借家人の間に見られた、溫情主義は、いつの間にか、昔のことゝなつてしまふであらう。

街の自然

よくその前を通る町の片側に、洋服の直しや、仕立をする小さな店がありました。眼鏡をかけたお爺さんが、夜は、遅くまで臺に向つて仕事をしてゐます。傍に、二鉢ばかりの盆栽を置いてゐました。ある時は、日當りに出し、ある時は、雨にあてゝやり、寒い曇つた日には、店へ入れていたはりました。いま、季節は平等に、二鉢の裡にもめぐつて來たのです。一本の欅は芽ぐみ、一本の皐月には、紅地に白のまじつた花が咲きました。微風は綠を吹き、日は花瓣を暈どり、そして、これをながめるお爺さんの顏は幸福さうに輝いたのであります。ああ、誰か巷に自然なく、自然を愛するものは、野に行かざるべからずといふでありませう？

新文藝の自由性と起點

思想は、流動する。何ものゝ力をもつてしても、これを止めることができない。社會現象を、唯物的に、機械的に、研究するもの、一つの方法にしか過ぎなかつた。人間が、機械そのものでないかぎり、この方法を唯一のものとどうして信ずることができよう。空想し、しようけいし、意慾し、感激することこそ人間であるからだ。そして、有する性格に、生活する狀態に、一人として、同じきはなく、從つて、同じことを考へてはゐないであらう。

これをもつてしても、人間同志の關係を、唯物的に經濟的にのみ見ることはできない。むしろ、これ等の人達が、互に接觸する場合に、より重きをなすものは、常に、感情であり、理性であり、一切の情緒である。そして、意志や感情の力によつて、團結し、行動を決定するといふのが至當である。

マルクス主義的社會觀は、この點について、窮屈を感じさせる。さう見るばかりを眞理と信ずることはできない。吾人に、思考し、意慾し、しよけいする自由のあるかぎり、これと反對に、人間關係を精神的に見ようとすることが、必ずしも、反動とはいへないのである。

何故に、ロマンチシズムが、我等の生活の上にあり得るか、これ人間の行動を、機械におけると同一の法則で説明されないからである。從つて、いかなる强權をもつてしても、過去において、これを限定することもできなければ、また、將來に對して、豫測し、決定することもできないのである。彼等のいはゆる必然觀が、果して、どれ程までに、正確に世界の未來について、豫言し得たであらうか？

また、マルクス主義者は、構成されたる組織上の惡と、人間の善惡の差別と混同してゐる。階級によつて、人間を、善惡に分たれるものでない。しさいにいへば、個々の人間について觀察すべきであるが、思ふに、人間は、すべて正しいといへるであらう。そして、彼等は、それを知つてゐるのだ。たゞ、これを無視するものは、機械的

に取扱はれ、人間と人間の間係を唯物的に解釋せんために、そして、その目的の經濟變革にあるが故に、ことさらに、精神的方面を閑却せんとするのである。このことは當然、社會、革新について意見の上にも、二つに分れなければならぬ。一をAとすれば一をBとするであらう。後者は、物質的配分方法を革めることによつて、新社會を生じ、鬪爭によつて、强權が、轉倒して、他の方に移る時に、幸福になり得ると信ずるのであるが、前者は、かうしたことに、さまで信念を置くことができない。

暴力や、權力は、何人の手で行使されたとしても、決して、反抗以外の何ものをも生むものでない。人生を益する創造は常に喜びの中から產れてくる。卽ち人間同士の愛と同情によつて結實し、相互扶助によつてのみ產れるものであると、信じてゐる。

それ故に、人間と人間との接觸關係である、社會現象を研究するにあたつて、感情を無視して、果して、何が得られるであらうか、鬪爭や、强壓によつて、決して、最後の平和を招來しもしなければ、また、安定の姿を確保されもしない。人間の良心が共感する作用を他にして、卽ち理解に基いて、構成されたる社會以外に、我らの理想は

あり得ないのである。

これは日常の生活の上に、徴して知られることだ。爭ひによつて、曾て幸福が得られたか。完全に、一方を倒さゞるかぎり（それは、ひつきやう不可能なことであるが）相互の承諾に待たなければならぬ。これを見ても、獨り、純情と良心によらなければ、眞に人間を本質的に改善することはできないのである。それには、人間を機械視すべきものでない。まづ、相互の自由と人格を尊重することからはじまらなければならぬ。

この意味からして、アナーキズムの精神は、最近の哲學、現象派にまで影響してゐるといへる。AとBの異なれる觀點に立つ思想こそ、今後も社會運動の上に、文藝の上に、顯著なる差別を描くであらう。

社會運動と文藝とが、同行すべきであることは、ひつきやう、より善い生活が、生活の藝術化であり、藝術の實際的表現に他ならないからである。たゞ、教育と文藝は、良心を對象として、目的を社會の純化に置く、たとへ政治において、直接改造の任に

當るとしても、それは、外面的の變革にすぎない。質をより善くするには、情緒の教養と自覺によらなければならぬ。たゞ、外面的の物質變革だけをもつてして、人生の感激を呼び、文化を向上し、生活を新鮮にすることはできない。眞と美と正義に對する情熱は、すべて、これ精神的の教化にある。社會改良の上において、むしろ、かゝる平素の內面的の教養が、いかに重要な役割を果しつゝあるかは、今更いふまでもないことだ。

かゝる理由からして、最近、教育學に、文藝に、眞劍に哲學を求めんとする風のあることを見脫してはならぬであらう。それ等の事業が、一片の文化的裝飾でなく、いはゆる上層建築でなく、それ自ら、獨自の根底と機能を有するものなることを信ずるからである。

マルクス主義文學は、政治的イデオロギーをそのまゝ文藝の上にとりいれようとする。こゝにそのことの正否を問ふのでない。たゞ、マルクス主義的社會觀の狹あいは窮屈を感じさせるが、社會運動にあつては、目的とするところは、その組織如何にあ

る。けれど直にこれを信條とし、それに支配されねばならぬ、マルクス主義文藝にあつては、より一層自由性を欠くものなることは明かである。復雜なる人生を對象とするものとして、あまりに、その文藝は、形式化し、硬直化したるものといはなければならぬ。

なぜなれば、政治的スローガンを意識して、創作しなければならぬ藝術は、束縛の藝術である。すでに、スポンテニユアスなき文藝は、藝術としての自然を欠いてゐる。その作家が自然なる信仰によつて、これに從事するならばそれは、喜びであり、感激であるにちがひがないが、この場合とて、作品の與ふる力以外に、感激を强要すべきはずのものでない。たとへば、人類の進化といふ問題に關心しても、一元論を信ずると、多元論を信ずると、いまだ今日になつては、その人の自由と見なさなければならぬ。

かく、人間が機械視されるところに、いろ〳〵のむじゆんした、また新たなる問題が提起せられるのだ、この豫斷されざる復雜な人間の心理と行動こそ、たとへ不可知

な宇宙の如きである。從つて、これに對する藝術的感興もわいてくるのである。

マルクス主義的に、人間と人間の接觸を物質關係以外に見ざる時は、もはや、そこに何の疑問とすべきものもないであらう。しかし、人生の事實は、往々にして、それ等の法則に反して、むしろ意志や、感情の反應と見るべきものが多い。故にせつ那主義の哲學が容認せられ、また、新客觀派のたい頭も見るのであつた。

これが、サンヂカリズムであらうと、表現主義であらうと、あるひは、現象派であらうと問はない。いづれも、唯物史觀と反對の立場にあり、常識を脱して、直觀的に生命のあるところをは握せんとするとに異りはない。そしてそこに、アナーキズム精神の多種多樣なる流れのあることをわれ等は知るのである。

かういひ得るもの、それが、マルクス主義の變改でもなく、修正でもなく、日和見でもなくして、全く、彼等と社會革新の意見において、前提を異にしてゐるためである。

いづれにせよ、ヘゲモニーの强壓によつて自由性を失へる文藝は、その姿態を一新

せんためには、もう一度出發點に歸らなければならぬ。そして、人間の接觸を彼等の如く、單に經濟的に機械的に見ず、これまでの解釋上の習癖からこ疾となつた學說的信條から、自分を解放すると同時に、純情に基く、客觀の認識により、相互に交感する生命の何ものなるかをつかまなければならぬ、こゝに、はじめて愛と正義と良心に指導さるゝ人生を察知することができる。卽ち、個にして同時に全なる自由聯合の新社會の相はうを、はうふつせしめることができるであらう。そして、この種の文藝はまさに、その水先案內たるべきである。

政治的役割を課せられたる文藝は、たとへ、ブルジョア文藝たると、ボルシエヴイキ文藝たると、それに異りはない。等しく强權により、個性を犧牲にせんとするものだ。次に來るべき新文藝が、これに對する反抗であり、かゝる强壓的文藝形式の破壞であることは、今更いふまでもないことである。

書物雜感

店頭に立つて、本を手にとりあげて、二三頁見たゞけでも、その書物の裝釘や、大體の感じなどからして、ほゞそれの有する價値が分るやうな氣のするものです。そして、多くの場合、その判斷はあやまらないが、この頃のやうに、一定の形で出來る叢書類には、裝釘や、色彩や、いろ〳〵の點で、著者の個性が現はれる機會なく、特色に乏しく一言すれば、機械化されてるために、さう、容易に判斷することができません。

★

內容も見ずに、また、その書物の體裁のいかんにかゝはらず、著者の人格で、買ふことがあります。卽ち、その著者の長い間の生活的態度によつて、たとへ、顏を見たり、また話したことがなくとも、自然と見當のつくものです。仕事に對して眞劍の人であるか、賣文、虛名の徒にすぎざるかといふことは、誰にも分るでありませう。

少くも、書物によつて、いまだ知らざるを學ばんとするものは、著者を師としもしくは、心友とするものであれば、著者の人格が、問題たらざる筈はない。

★

知るといふ意味からして、最近、頻出する社會科學や、新藝術の飜譯について、少しでも多く學びたいと思つても、はつきりとして、あぶなげがなく、よく分るといふ書物は、いたつて稀です。中には、三四頁を讀過しても、どういふことが、そこに書かれてゐるのか、意味の呑込めないものさへある。

かういふ種類の譯者は、自身どれ程、原書を理解してゐるのが疑はしい。それを他に傳へようとするなら、意味の分る筈がないのであります。小說のやうなものはたとへ原作者の骨を折つた細かい部分が傳へられなくとも、筋だけは分らないことがないでせう。けれども理論に關するものは、すべからく、明晰、確實を缺いてゐてはならない。たとへば、譯者が、原著者の文章を朦朧に解し、誤譯し、それをまた自分流に解釋して、信ずる讀者があるとしたら、害あつても、益なきといふべきであります。

私は、かゝる、良心なく、たゞ賣らんための書物に出遇つて、折角、買つて來たのだから、讀まずにしまふのも、惜しいといふ理由だけで、どれ程、頭を痛め、時間を空費したことがあるか知れない。そして、その時程、また腹立しいことはありません。その書には、どんな、最新の學說が取扱はれてゐたにしろ、かうした譯書の價値は、いかなる低級な赤本にすら及ばないものです。

★

書物の魅力は、著者及び譯者の、眞劍なる研究的態度と、その謙遜にして、文字を苟くもしない表現にあると思ひます。

★

書物は、實際的のものと、趣味的のものとの、二種類に分たれます。これ等は、書く人、また、讀む人、各の境遇によつて異り、選擇さるものです。

人間の生活上、常に、この兩者は缺くべからざるものです。卽ち、一面、實際的の問題にふるゝと同時に、また他面には、趣味的の生活がなければならない。しかるに

この人間的な生活が、だん〳〵現實社會では出來なくなる傾向を來してゐます。あまりに職業が分科的となり、一方、働く者は、働き通しであるにかゝはらず、遊ぶものは常に、遊ぶことばかり考へてゐるといふ風であります。まづ、學生時代だけが、いろ〳〵のことに興味をもち、また、いろ〳〵のことをある程度まで研究されるのであるが、社會に出てからは、それを欲しながら、すべての點で自由を失ひ、從つて、生活も偏し、讀書までが、かたよつてしまふのであります。それは、人間生活といふ上から考へて、決して、いゝことでないにちがひない。

★

なぜなら、獨り、書物だけが、知らない世界を見せ、生活の内容を廣くさしてくれるからです。私は、平常自分が職業としてゐる方面以外の書物にも、興味を感じてゐます。人間として、知りたいと思ふことに對して、自からかぎる必要はありません。空想し、意欲することこそ、人間の生活なのであります。

しかるに、いつしか人生に必要なものより、つひ、目下自分に必要なものだけを見

るやうになるのです。

★

これが、筋肉勞働者であり、また、勤人であるならば、一日の勞苦を忘れるために慰めとなるやうな本を撰ぶことも、不思議ではないでせう。多くの場合、研究家は別として、讀書によつて、樂しむといふのが本當であります。けれど、文筆で生活するものは、また、必要上、弛緩した氣持を鼓舞し、感激を受けるために、より刺戟のある調子の高い書物に接せんと希ふことがある。そして、より一層、強く、鋭く、現實に生きてゐるといふ意識を切實に持たうとする。そして、これを基礎として生れた創作や、文章でなければ、眞に時代に生きるものゝ仕事といふ感じがしないのであります。かうした考から、書物を讀むのはちやうど、もつと強く生きよと鞭打たれるやうなものであつて、せめて、その意識に浸る間だけ、讀書に時間を費してもこれを空費したとは思はないのであります。

すべて心臓から湧き出た文章には、つまらないものはない。たとへ、ある人には、

閑文字のごとく思はれても、やはり、そこに人間生活の表現があるからです。しかし慌しい緊張した生活に追れるものにとつて、ぢつとして、落付いて、直接關係のない文章を讀むといふことは、また、別の努力を要します。すぐうしろに、差迫つた生活と仕事が控へてゐるのに、こんなものを讀んでゐる閑があるか?と、耳許で叫ぶものが、あるやうな氣がしてならないのです。

☆

たとへ、美や、眞や、正義に、かはりはなくとも、常に、學說や、思想は、その時代を基礎とするものです。故に、參考とか、研究とかいふ、特別の理由のないかぎり書物を保存する必要はないやうに感じます。それは、書物ばかりでないが、所有欲の強い人達は、書物を、やはり物とし、また、財產として考へるがためでありませう。

私には、特に、愛讀書といふものがない。感銘の深かつた書は、多々あるが、それを藏書として幾度もくりかへして、取出して讀むといふことはなかつた。また、その著者を敬慕はしても、その人だけのものを特に愛藏するといふこともなかつたのです。

すべて、自由人は、主義を持つといふことすら不自然かどうか分らないが、かりに自由でないから、主義を持たなければならぬとしたなら、せめて、その主義に關する書物だけでも。賣らずに置きたいと思ふのであるが、格別、それに執着を感じないために、いつしか賣つてしまふのであります。

☆

生活にとつての書物であり、書物のための生活ではないのです。

☆

一冊の書物は、要するに、一握の滋養物です。その感じからしても、私は、古本を買ふ氣にはなれない。つまらぬ潔癖にもよるが、何となく汚れた本を讀むことを好みません。新しい書物のみの持つ、香りをかぐことが好きです。

☆

私達にとつて、一冊の書物を買ふために、金を投ずるのは、なか〳〵容易なことでありません。澤山な新刊の書籍が、本屋の店頭に並べられてゐるが、さて、どの一冊

を買ふであらうか？　これに對して、前にあげたやうな諸條件が、私の頭の中を去來するのです。現在の自分としては、最も、生活に、積極的な感じを持たせるもの、それを撰ぶでありませう。

明日の大衆文藝

知識階級的であつた文學は、やうやく庶民を對象となさんとしつゝある。大衆生産階級を忘れてゐた文學は、何んといつても、これを支配階級に阿附した文學と言はなければならぬ。

政治が、さうであつたことは、いまさら言ふまでもない。大衆の政治でなくして、少數支配階級のための政治であつた。常に、その時代の政治形態と樣式を一つにすべき性質のある文學が無產政黨の出現すると共に、いちゞるしく進展したことは、この兩者に於ける共鬪の理由を實證することに他ならない。

その智識階級を對象として、特種な趣味やまた技巧に腐心し、その喜ばれたのは過去であつて、今日、新聞、雜誌に、載りつゝある文藝を見る時、すべては大衆文藝の跳躍に委してゐる觀がある。

◇

庶民階級は、働きつゝある階級であり、文藝を娯樂とし、また、これから何等かの感激を求めんとしつゝある。いまゝでの所謂、純文藝なるものが、これに適さないことは言ふまでもない。

これは、決して、讀者の無智、低下を意味するものでない。むしろ、常に、人生的であり大衆を對象としなければならぬ筈の作家の不用意に歸すべきものであらう。

誠實にして、時代を知り得る作家ならば、大衆教化に適すべき文章を創るべきであつて、簡明素朴の文體を選ぶのを至當とするのである。

この意味に於て、今日の大衆文學は、明日の大衆文學となり、得る性質のものでない。さうした大衆教化のためにも、また生長しつゝある、新しい、明るい生活樣式を指示するものでないからだ。たま〳〵現代に取材するものもインテリゲンチヤ的デカダンニズムであり、また場面を維新前後にとられるものは、封建時代の生活的反影が時代的に一致することによつて、喜ばれるために他ならない江戸末期の庶民的感情と

今日の被搾取階級に於ける反抗的感情とが期せずして一致したゝめである。

◇

どの種の大衆文藝にも、爛熟した戀の場面から描かれてゐる。また流血が描かれてゐる。これ等は既成文化の末期的の現象に他ならないのである。

たゞ、これが面白いとか、平易に書けてゐるからといふことは、新興文學の構成的要件にはならない。面白く、明かるいうちに、新しい生命の脈搏がなければならぬ新しい道德と科學の討究によつて實證せられたる眞理を、二たび情熱によつて詩に醇化するものがなければならぬ。

いまの大衆文學の多彩、絢爛は可なり絶望的のものと見られぬことはない。しかし明日の庶民文學は、むしろ、單純なる表現形式のうちに、力强く、未來を肯定し希望を抱かしめるものでなければならぬ。

農民の中に、都會勞働者の中に、はいつて行く、これ等の文藝は、最も多く示唆に富み眞理に對して確認を抱かしめ、教化の任をはたすべき責務を有してゐる。

◇

轉換期に於ては、藝術はこれまでのごとく、藝術のための藝術をもつて居られなくなる。政治、經濟の實際運動に刺戟されて、動搖するばかりでなく、それ等の實際行動の分野に從つて、幾つかの形態に分れるのを常とする。たとへば、現無產派文學がそれ〴〵支持しつゝある政黨によつて、自らも形態を異にするのでも分る。

これは、文學運動が先驅をするのでなく、むしろ、實際運動に引摺られて行く形なのだ。また、それが、かうした時代にあつては、不可避のことであり、必然でもあるであらう。なぜなれば、當然來るべき反動に對して、これ等の運動は、僅に、文藝を通じて、意見を表白し得るに過ない場合もある。

かく、見る時は、無產派文藝の分裂は、必然であり、實際運動の旗色に從つて、それ〴〵支持する文藝團は、特殊的に尖鋭化する。

こゝにのみ、今日の正統文藝の姿態はある。けれど、大衆を指標とする文藝は、これ等の戰鬪文藝と別に考へるべき性質のものである。それは、前線に立つものでなく、

むしろ後退して、來るべき新社會文化建設のために、民衆の教化に力をつくすべきものだ。一局面に限られたる、批判でなくして、全的として人間生活を見るべきためのものである。

◇

私は、新しい見地に立てる童話文學のごときは、まさしく、この教化に役立つ、新しい文學形態であると信じてゐる。

なぜなれば、それは、小供とかぎらない、一般の成人にも、農村にも、工場にも、入るべき性質のものであるいづれにしても文藝は、表現であるかぎり、天分ある作家の出現を得なければならぬのであるが、形式、技巧に於て、素朴と、單純と眞實は、この種の文藝に堅く約束さるべきものである。

當面の文藝と批評

一

今日の大衆文學を讀んで、その作家に、いかなる生活の要求があり、また理想があるかといふことを見出すのは困難である。なぜなら、それ等の作品が、作家の自由性においてよりは、資本家の意圖により機械的に構成されたものが多いからだ。そればかりでない、實際における大衆の生活を見るに、今日の大衆文學に取扱はれてゐるやうに、しかく平面的なものでなく、全く、個別的な存在である。即ち、生活層の異れるにつれて、美に對しても、また道德に對しても、多樣なる見界を持つてゐる。そしてそのことは至當であらう。

それであればこそ、大衆には、生活の代辯者が必要なのだ。言を換へれば、彼等に屬する詩人であり、作家たるものが必要なのである。これまで、民衆藝術家たる稱號は、大抵かゝる類の作家を指したのであつた。そして、他には存在しなかつたやうで

ある。

しかるに、最近、大衆生活における特種性をば認めず、あるひは、たゞ平面的に營利の對象としてのみ考へるに至つて、その文學においては一般に共通した趣味を探りいたづらに喜びさうな事件を描いて、資本家のためにつくしてゐる。今日の變態的な大衆文學の多くは、まさしくそれだ。だから、その作品の上には、資本主義そのものゝ有する特徴の反映がある。また、この種の文學には、作家の個性と、藝術の獨自性を無視せるが故に、たとへそれ等が千篇一律であらうと、あるひは賣行のよかつたものゝ模はうが百出しようと、關するところでない。たれもこれを不思議としない。

そこに、筋ばかり考へる文學と、獨創を重要視する藝術との相違である。これによつて、大衆文學とプロレタリア文學との間には、何等の共通點がないといへる。今後も今日の大衆文學が、そのまゝの形にて、眞にプロレタリア化することは、恐らくあるまい。なぜなれば、兩者には、その發生においても、また過程においても、同じいものがなかつたからである。

一方、プロレタリア文學の現在には、自から順序があつた。プロレタリア作家は大衆作家と、同じやうに、既成文學の知識階級的取材の版圖を越えて、ひろく庶民生活を描いた。時に、農村の百姓を描き、時に、工場における勞働者を描いた。しかし、それは、その人達に對する眞の理解なしには書けないところであつた。大衆作家が、興味を主とするに反して、これは、彼等がいかにして、さく取され、れい屬さるゝに至つたか。また貧困の結果から、いかなる種類の悲劇が、その家庭に生れたかといふやうなことに、中心を置いた。しかし、さういふやうなことは、ブルジョアおよびブルジョア作家等の喜ぶところでなく、大衆すらもが、作品は、常に戀愛を描くものであり、享樂を受けるべきものゝやうに考へて、あまり好むところでなかつた。しかしながら、眞に生活に苦しむものにとつては、彼等のための代辯を要求しないはずがないのである。またなくていゝ道理がないのだ。卽ち、民衆作家は、その人達のための代辯としてゞある。彼等を擁護し、また彼等を奮勵せしめるために、そして、たとひその作品が、現制度の下にて、商品的形式を取るのやむを得なかつたにせよ、眞のプロレ

タリア作家の書かんとした動機はそれ以外になかつたといへる。

この正義心に鬪爭的行爲は、なほ、今日の無產派文藝に流れてゐるであらう。しかし、たゞプロレタリアの生活樣式を描寫するだけで足れりとするのは、この派の文藝として全目的を達する所以ではない。さらに大衆に對してたえず淸新にして、はつらつなる希望を示すことが必要なのであつた。卽ち、革命的ロマンチシズムである。かゝる良心と認識と情熱は、どのプロレタリア作品にもあるといふことはできないが、もとより大衆文學には見られないところのものだ。

二

思ふに、明日の作家は、文藝の上にも、いまの大衆文學の多くが取扱ふものと反對に正義と平和をスローガンとしなければならぬであらう。そして、そのために戰ふことはやがて反動時代の產物であり、またその時代の影を濃厚に反映する、既成文藝との戰ひを意味する。かくして新興文學の旗色を鮮明ならしめるにある。

いまゝで純情の作家等が、信條として來た、藝術のための藝術主義は、すでに社會において成長の餘地がないであらう。それは、いふべくあまりに分りきつたことでないか。そして、政治と文藝の關係は、今後、一層密接なものとなるにちがひない。このことは單に主義、理想を同じくするためばかりでない。いかなる時代を見ても、反動の危機に際しては、自然政治に關する言論の表白は得られないからである。そして、これを文藝の形式に借りなければならぬ。その意味からして、過渡期の文藝には、それ自らの作品形態を決定することができない理由がある。むしろより多く同行する鬪爭主體の狀態に從つて、あるひは主觀的に、あるひは客觀的に、內包する思想、感情によつて定められるものだ。それ故に、今日の情勢からして、プロレタリア文藝が、大體において思想的であり、說明的であり、從つて主觀的であり、鬪爭的であつても、とがめることはできない。藝術が、常に具象化されたる現實描寫を出づるものでないと、既成作家の一部が考へる如きは、そのことがすでに藝術の自由性を限定し、活動をさまたげるものだ。あだかも、支配階級に依據せるブルジョア文學が、今日の支配

階級的、基礎機關の形態をその上に如實に反映せることによつて、昏迷、虛僞、享樂、無理想を特質としながらも、執えうに舊文化を擁護して、新興の藝術をそ止せんとするのと、その結果は同じである。

現に、プロレタリア文學の分野には、アナーキズムを理想とするものと、マルキシズムに立脚するものと、多彩である。この二つは改造の道程を異にするはもちろんであるが、いまこのことについては論及しない。たゞ、たとへ同一主義に立てるものでも、各の關係する鬪爭主體の行動によつて、指標を異にし意見を異にするに至つて、分裂する。かくいくつかの實際運動と同行するいろ〳〵の文藝が、主體とするものゝ分裂に從つて、さらに分派し、旗色を新たにするのもまた當然と見なければならぬ。しよせん、主義に忠實なるためには、理論鬪爭を生じ、いくたびか淸算せられる。たゞ、この場合、そのいづれにも眞の無產階級たらんとする誠意に異りのないことを認めなければならぬ。

最近においては、マルキシズムおよびアナーキズムの文藝雜誌が二三にとゞまらな

い。しかし、各の支持する主體は異つてゐるやうだ。このことは、第一線に立つ闘爭主體が、常に同行する文藝に特種的な役割と形態を與へることを實證してゐる。

ただ、微細なる理論闘爭が、どの點まで同行する文藝的作品制ちうと使命を與へるかといふことについては分らない。しかし、そのことが文藝批評の上には、可なり鮮明に表白されてゐるといつていゝのだ。要するに、かくのごとき使命を果すことによつて過渡時代の文藝は特種的なる意義をもつことができる。これを在來の美學的見地から見れば、奇形の文藝であるかも知れぬ。しかし、それがまた今日の時代での正義なのだ。

眞理を信ずる者にとつては政治においてゞあると、また文藝においてゞあると、殉ずる上に變りがないであらう。かくして新文化の建設は、誠實なる者の協力によつて成されつゝありといはなければならぬ。

三

さらに、文藝としての作品と批評の領域について一言することは無意義でないと考へる。

作品にあつては、前にも言及せるごとく、新興階級の生活様式を描くと共に、無産階級的正義と美について表現することである。それは無産階級が、長い間生活においても、感情においても、强壓されて來た。そして、今や機會は自らについて、また周圍に對して、まさに表現すべき多くを持つからである。

ある人々は、最近小説の不振を身邊描寫の所爲に歸せんとしてゐる。しかし、それには確固たる理由とするものがない。自分自らを表現することが、何故に惡いか。畢竟理想への進擊も、大衆のためばかりでなく、また自己自らの生活をよくせんがための戰ひに他ならないからだ。たゞ、その作家が、活動的にして、闘志に富みさらに表現の技巧を有するならば、それだけで尙時代の動きを寫すに足りる。そして、その中

に生動する感激は何人とをもみさずには置かないであらう。たゞ怪奇な、また挑發的な材料だけが創作をなさしむるのでない。

それ等の作品が、面白味を欠くに至つた原因は、すでにその作家の美に對する感覺が硬化し、眞理を探求する心が減怠し、いつしか自らの生活にすら感興を失ふに至つたゝめである。もし、その作家が、いつまでも正義と美に對して、しようけいを持つならば、永久のロマンチシストであるならば、獨り科學の實證の前にのみ屈せずに、これを詩にまでじゆん化して訴ふる創造的なリアリストであつたらう。なぜならば詩のみが、よく萬人の胸から胸に傳はる力のあるものだ。殊に今日のプロレタリア文藝に欠けてはならぬものは、革命的ロマンチシズムの精神である。一言にしていへば、概念は藝術を構成しない。いつも藝術は、生活の正しき認識と情熱から生れるのである。

廢頽し、崩落して行く、資本主義文化の下に早くもこれに代るべき新組織は生成しつゝあつた。この機微にして自然的なる現象を何人も見逃すことはできないで

あらう。

それは、新興文學の運動が、希望ある、決定的な闘爭であつたからだ。しかし、現制度の下に十分に基礎を置くまでには、まだ反動と强壓とを覺悟しなければならぬ。また、こゝにのみ先驅する者の苦闘と煩悶は、その矛盾から生ずる、文藝についていへば、專門的作家は、なほ資本主義的機關を借りなければならない。このことは眞のプロレタリア文藝が、自由に成長する所以でないのである。無產階級的作品は、批評は、無產階級の新組織内のみにて誠の發育を遂げるものだ。こゝにおいてか、同志の純粹なる計畫よりなれる同人雜誌や、パンフレットが、いつしか知らず重要なる使命を果しつゝあるのもこのためである。

さらに思ふに新興文學は、いかなる場合にあつても、ブルジョア文學と抗爭する。故に、これ等の作品を價値づけるには、實に新しい批評の力が必要なのである。そして、今後といへども、これに伴ふ批評の力如何によつて、かれ等の勝敗が決する場合の多いことを思はなければならない。

こゝにおいて、批評家は、新興文藝に對しては、資本主義のあらしの中にこれをひ護し、後援すると同時に、他方自ら信ずる主義、思想に殉じて生命を賭して戰へる者のために、その行動を支持すべきであらう。そこに、今日のアムビシヤスな文藝批評の任務がある。

四

最近、私は上野にて、第一回プロレタリア美術展覽會を見た。その時の簡單なる印象をいへば、これまでのブルジョア美術展覽會にて感ずるやうな、よどんだ感じを受けなかつたことだ、また、少しの疲勞とけん怠をも覺えなかつた。さながら、とう徹した青空を見て、冷氣に觸るゝごとき、清明な感じを受けた。この濁りのない、清明の姿こそ、新藝術の特徴ではあるまいか。

世人が、新藝術の存在理由について、考ふるならば、まづ何故にブルジョア藝術が、かくまでに衰たいしたるか。その根本の理由を考ふることである。それには、いろ〳〵

の理由はあろうが、第一に、文藝も、美術も、ひとり哲學上、もしくは、美學上の問題だけでなくなつたことに原因する。そしてそれ等の存在權を決定するものが、實に作品自らの有する社會的動力に歸するに至つたためである。藝術の社會的進出、それ以外に理由はない。

かくして、作家に、自らの主義を明かにしなければならぬ必要に迫られたのだ。また批評家は、より一層その立場を鮮明にすることが必要になつたのである、なぜなれば、前者は自ら稱して、プロレタリア作家といひ、後者は、また新社會を大衆に指標し、作品を評價するにあたつて、根據なき批評の立場は許されないからである。

プロレタリア文學の使命と、反動時代における文藝批評の任務は恐らくかくの如きものであろう。しかし、當面の文學としては同じく無產階級の陣營に立ち、大衆の教化的使命を帶ぶるものに、もつと他の藝術がなくていゝだろうか、そして、そこにこそ眞の根本的のものが、まだ殘されてゐる。卽ち前線に立ち、苦しめる者の代辨と抗爭を兼ねる、いはゆる鬪爭的な藝術だけでいゝのでない、大衆は、自覺程度にしろ、敎

養程度にしろ、雜多である。それだけでいゝはずがないであろう。たとへば、中ようなる民衆の中へ、またこれから社會へ出ようとする兒童等の世界へ、はいつて行つて、人間としての基礎をつくるやうな文學が、より重要なのであつた。これは、その性質からいつて、もつと廣汎を支配すべきものなるが故に、實際運動と同行するやうな、しかく先鋭的なものではいけない。また、しかあることを要しない。むしろその意味からいつて、幾歩も後退した所に立つものである。正直、清純、規律、平和、勒勞等を、本質とする文藝である、そして、專心、教化のためにつくすべきものゝやうに考へられる。

なぜならば、この程度の無產階級が、良心と勇氣を伸長せしめるための、理想的の教化機關を、今日いづれに求めたらいゝだらうか。それに比すれば、支配階級の教化機關は到る所に完備されてゐる。もし、無產階級が、これと對立して、文化の上にて抗爭するためには、まづ、何よりもこの種の藝術が必要なのである。

理想をいへば、眞に社會を愛し、平和を愛する、純情の作家を共に得なければならぬがかゝる作家の出現を待つまでもなく、この種の藝術形態を確立することがもつとも肝要なのだ。そして、これに費す努力と成果に至つては、他の戰線に立つものと優劣はつけられないであらう。將來を考ふる時に、何人もこの種の文藝が、決して空想の產物にあらざることを信ずるにちがひない。

かりに、これをプロレタリア的大衆文學といつて置かう。このプロレタリア大衆文學は、その形態の未定なるにかゝはらず、すでに今後に多くの約束を持つてゐる。これは、資本主義に依據する營利雜誌が、大衆の弱點と享樂性とを巧に利用して、今日の如き大衆文藝を造れるに反して、この新文學は、それによつて、無產階級に浸染した、ブルジョア趣味や、不健全な惡習を洗できし、代ふるに光明あり、悅樂あり、希望ある、人間本來の團結と相愛の世界を示し、導き、活動的の生活に引戻すための文藝であるからである。

すくなくも、いまゝでブルジョア文化によつて教養されたる一般大衆はいまだ人生の自由について、また幸福について、深く考へなかつたであらう。彼等は、ルンペン

の如く同じやうに金のために、あるひは、權力の前に、幇間のごとく、良心を賣り、個性を賣り、清節を賣り、そして、物質的に滿足することをもつて、本來の幸福と考へてゐたにちがひない。

五

これを思へばプロレタリア大衆文學の使命は重大である。民衆に對して、いかにすれば、吾人は眞に人間として生き得るか。また社會的正義を果し得るかをもつとも分り易く説明するにあるからだ。

そのために、プロレタリア大衆作家は、特種的なる觀察から、いろ〳〵の生活の姿態を描く自由は有するけれど、重なる目的のどこに出るかを忘れてはならぬ。卽ち鬪爭意識を主とするよりは、全的として、人間生活を取扱ひ批判するやうな文藝が必要だといふことを忘れてはならぬのだ。それ等の條件を充たすやうな文學が構成された時に、新しい大衆文學は成功したといはれるであらう。しかし、分り易く、親しみ易く

書くといふことが、單に頭の中の考へだけではならぬ。簡潔、純ぼくなる描寫にも、また特別な技巧のさえがいるのである、そこに、この作家としての天分は存するのであつた。

私は、これ等の前提を顧みて、こゝに新興の童話文學を提唱する。それは、一般大衆にのみとつて必要なのでない。幾千萬の兒童にとつてもまた必要だからである。現在、可憐なる兒童等は、彼等の親切なる代辦者を有せざるばかりに、いかなる强制の下にさらされつゝあるか。多く考へを要しない。まづ、その讀物として、大量に生產されつゝある資本主義的營利を目的とする、月々の雜誌について檢て見よ。いかなる性質の記事をもつて滿載されつゝあるか。全篇、これ頑强な保守思想のあらはれでなければ、怖るべきミリタリズムの鼓吹ではないか。そこには、熱血こそ流れてゐないが、人間が、人間を殺す行爲なのだ。かうして、隱に次の世界戰爭のための豫備軍は造られつゝある、それにもかゝはらず、現在の學校教育は、全く、支配階級の機關に屬し、その意思の反映にしかすぎない。かつ教育家の無氣力は、つひに眞理のために、かゝ

る暴力に對してすら戰ふことを忘れてゐる。それであるから、明日の社會の何たるかをさへ考へてゐない。從つて、兒童等に對して、誘導すべき健全なる理想を有しないのである。

このことは、ひとり學校といはず、多くの家庭とかぎらず、すべて現社會が、兒童等に對して、なしつゝあることは不親切といふ言葉につくされてゐるのだ。これを救ふには、諸般の設備によらなければならぬが、第一に讀み物の改善であらう。民衆および兒童等について考ふる時、民謠、童話、偶話の將來を想起せずにはゐられなかつた、

這般、誕生した「新興童話作家聯盟」は、まさにこゝに目ざめた結果である。その聯盟を結成せる分子には、主義において、職業において、もとより同一といふことはできないが反資本主義的にして、社會認識ある作家といふ點だけでは一致してゐるはずである。そして大局の前に、相互協力を期するといふのも、眞理を愛するがためであつた。もう一つには、それが、全く大衆、兒童のための文學であるからによる。幸に、その人達にして初志を貫くならば、この聯盟の前途にかけて多くの期待が持たれ

るのだ。こゝに、思ひだす言葉がある。

「いつも、仕事の上に感ずるのは、金の心配ではない。その目的に向つて直進する人間がないといふことだ」これはクロポトキンが、ジュラ同盟の當時、同志を戒めた言葉なのだ。或時は、今にして、その言の極めて眞理なるを知るのである。

『餘　記』

その後、「童話運動」と關係を斷つてから、强權主義者が、私を批判してゐた。私は、マルクス主義者でない。社會運動に關し、兒童文學に關し、意見を異にし道程を異にするのは當然である、當時、これに答へなかつたのは、すべてが、今後の實際戰に繼續する問題であるからである。

兒童文學の動向

一

凡そ、文藝が今日の如く墮落してしまつて、大衆の教化といふことを忘るゝに至つては、そこに、藝術としての本來の使命も、また、尊嚴も存しないのである。大衆の俗情に媚び安易と妥協することは、藝術の本意でない、それは、政治に於けるよりも、經濟の力に於けるよりも、もつと高遠に人生の指標を置く運動であつた。藝術を定義するもの、古來、その人によつて異なり、また少なくなかつたが、そのいづれについて見るも、現實の生活をより高遠に導くことゝ、人生の內容をより豐富ならしめることをもつて、本旨とせることに變りはなかつた。新しい藝術上の主義は、ついで起つた。しかし、その窮極に於て、善と美と眞とを現實に持ち來さんとする、運動に異りはなかつたのである。

すべて、藝術にあつては、個人の理解に待ち、良心の反省に待たざるはない。萬人

に、等しく至高の感激を與へ、情意の世界を醇化することを、その力とせざるはないのである。政治のごとく、强壓に依つてゞなく、經濟のごとく、外的の機械的な關係に依つて、しからしむるのでない。人間を心の根底より改善することを以て本旨としたのである。

藝術にして、もし、この至高、至純の感激を第一義とすることを忘れたなら、その作家はすでに藝術家でなく、その作品に、商品以外の何ものでもないであろう。さなきだに、今日の文化が、こゝに至るまで、この建設の過程にあつて、いかに、各方面に於て、貴い犧牲が拂はれつゝあつたか。たとへば、純粹科學の研究にしろ、また機械の發明にしろ、また困難なる工事や、建築にしろ、或は、教育に於て、宗教に於て、本當に人生のために、寄與せんとして、盡粹した人々は、その一生を捧げたのであつた。我等は、その例を引くに難くない。同じことが、藝術にあつてこそ、はじめて藝術は、尊貴に値したのである。

しかし、時代の波濤は、時に、其等の分科の上に、あるものは、榮え、あるものは、

衰へしめるばかりでなく、本來の形態をも、異樣に變せしめるのである。今日、政治が進出して、すべての文化をそれに隷屬し、指導し得ると考へるが如き、文藝が、本質とすべき使命を忘れて、いたづらに、大衆に媚び、一種の娯樂機關以外の何ものにも値せざるが如きは、たとへ、一時の現象にしろ、現在に於ては、動かし難き事實といはなければならぬ。

文化機關が、眞の文化に役立たず、今日の如く、資本主義に隷屬して、全く營利化せる結果、殊に大人を對象とする文藝が、墮落するのも是非なきことである。大衆は、日常生活に於て文藝に依賴して、眞の幸福を見出さんとするよりは、一層、彼等を直接に支配する政治に、また生活を左右する經濟に、むしろ重きを置くことも自然であろう。故に社會の改善を考へる場合にも、何よりも政治に重きを置き、これを唯一の手段として、文藝を輕視し、文藝に於ては、單に、娯樂を得んと欲してゐる。

かくの如きが、その現狀であるかぎり、至高の教化は、卽ち藝術なりと、假りに言ひ得るものを求むるとすれば、兒童の文藝を他にしては、考へられないであらう。

二

兒童の文藝は、その種類を問はず、目的の兒童に對する至純の教化以外にないからである。人間として持つ、感情、意志、判斷、等卽ち、全人格を構成する人間的要素の洗練と鍛治を覺するにある。卽ち其等の完全なる發達を理想とする。なぜなら、個性の開發は、その人が持つて生れたる、性情の充分なる教育を措いて、他に考へられない。また、兒童の教育は、內部に胚胎せる、復雜にして、微妙なる萠芽の生育にあるのであれば、すべて、これを創造と見做し得るものである。

教育家が、自らの人格をもつて兒童に臨み、良心の覺醒を促すことも、藝術家が、作品によつて、兒童を內省せしめ、正義、善惡の觀念を明かにすることも、すべて、創造であり、感激であることに變りはない。

文藝は、まさに、一般的には墮落したのであるが、なほ本來の本領と使命を僅かに、この兒童文學の上に殘してゐる。それは、決して、偶然でないのだ。一言すれば、世

間の害毒から、兒童等を防衛せんとするにある。制度惡から、また惡思潮から、生ずるところの不幸の幾多は、當然、現役の役目にある成人によつて、極力除かれなければならぬものだ。そして、自身を解放せしめると同時に、後より來る者を救はなければならぬ。すべてを兒童等に知らせる必要はない。

我等が、學童に望むものは現實に打克つて行く氣力である。我等の力にて達し得なかつたものを成し遂げる力である。それには、人間としての完成へであり、輝かしき理想の把握でなければならぬが、先づ、彼等自らを、善き人間たらしめんことである。理性と感情とを出來るだけ發達せしめ、人間的な力の持主たらしめることである。この意味に於て、少年時代を豐富多彩なるの世界に住せしめなければならぬのである。何を苦しんで、早くより、過度に、現實の惡方面や、苦惱を知らさなければならぬ必要があるか。知らずにすまぬものならば、その時に至つて、知るであらう。教育や、藝術は、先づ、その人自身からが、善き人間たらんことを理想とする。

ミュウレンの童話には、新鮮、尖鋭な詩が、多分に含まれてゐる。けれど、所詮、

階級闘爭の宣傳讀本に過ぎない。マルキシズムの理論に從へば、理想社會への道程として、必然的に階級闘爭を經過しなければならぬのである。そして、これを眞理としてゐる。しかし、人生には、いまだ經驗されざる眞理の多くを持つ。限られたる實證によつて、人生の全部を演釋することはできない。社會組織革新の理論として、科學的に構成されたりとしても、これを以て、人生を改造すると考へることは、過信といふべきである。のみならず、社會は、階級闘爭か、相互扶助か、いづれを重しとするかは、尙ほ、多くの議論の殘されてゐる筈だ。むしろ、眞理に對して、謙遜であり、忠實たらんには、いかなる場合に於ても、强壓を可とするごとき、權力的の議論を、排さなければならぬ。この人生の針路は、幾多の經驗より歸納されたる眞理に附くべきものが、本當ではあるまいか。

三

こゝにて、社會科學上の議論をする意志を有しない。たゞ、社會認識なき兒童等に

對して、決定的なイデオロギーを植附けることの殘忍を言へば足れりとする。これ、いまだ人間的に完成されざる、夢と感情の世界にあるものを、冷酷にも機械化し、そのために、成就すべき、情意を壓殺するからである。

これまでの劃一的教育が、兒童を機械的に取扱ひ、個性を無視したる結果、今日の教育は、解放を叫び、人間として、善く成長せしめることに、努力しつゝあるではないか。兒童等の前途には、いまだ、何んにも知れざる偉大なる創造の世界が横はるのである。いかに、彼等が、自からの力によつて、自由に大膽に、それに向つて、開拓の鍬を下すかは、すべてこれを次の時代に期待する、たゞ、彼等を鼓舞するには、慈愛に滿てる教育家と、正義に導き、至高の感激を與へる藝術家の協力に待たなければならぬのである。

これを顧みる時、これまでの兒童文學は、一切を兒童の理解と、反省、内發に待たずして、專ら、既成の道德に、方針に、强制的に誘導すべく存じてゐたのである。そして、兒童等が、内部に持つ、特色多き、獨自な世界を理解し認識することに力を用ひ

なかつた。

その罪は、當然、文藝家にもあれば、また、教育家にもあつた。彼等は、その時代の政治方針をそのまゝ文藝の上にも、教育の上にも反映することを能事とした。そして、それに對しての批判を怠り、盲從して、足れりとしたために他ならない。

餘事については、しばらく觸れずとして、兒童文學の指標は、全的に、人間を見、公正に社會を知らしめることである。そして、誠實と友愛と正義の觀念を持たしめることである。人生をより美しく、人間をより善くすることが、その理想でなければならぬ。從つて、兒童の世界には、一切の强權を排除し、それを純化する。

教育意識の清算

一

方向のない、發程といふものが、事實あり得ないごとく、目的を持たない、教育といふものもあり得ないであらう。思ふに、その方向が正しいか否か、その目的とするところが果して當を得てゐるか否かに問題は存してゐる。たゞ、その行動の彼岸とし、また目的の究極地となすもの、人間一代の力の能くするところでないがために、理想の繼承者として、子孫の教育を必要とするのであるまいか。

智識に於て、情操に於て、もしくは技術に於て、現在不可能なることも、將來に可能でないと何で言へよう。人類は、これ等の越ゆべからざる困難に打克つて、ともかくも、こゝまで踏破して來てゐる。そして、現在が、いまだ、その終りであることを意味しないごとく、尙ほ、百千年にわたつて、人類は、いろ〳〵に試練さるべき運命を負つてゐる。

今日、教育に最善をつくさんとするのは、やがて、それだけ明日に多く伸びんとするがためである。かくのごとくにして、實に、兒童は、次の時代の照明であり、點火さるべき實體なのである。

すべての炎は、その燃やさるべき材料の性質、長短如何に從つて、光度を異にする。眞埋の聖壇に、いかに、その時代の蠟燭が、過去より現在に至るまで、かくのごとくにして續ぎ足されて來たことか。

何よりも、火は、明るくなければならぬやうに、人間は、何よりも、人間的であらねばならぬ。其他の教育意識は、排除せられても、たゞ教育の要は、これがために存すると言はなければならぬ、そして、實に、功利的な教育意識は、清算されなければならぬであらう、かりに、技術をよくするも、智能を啓發するも、みな人間生活を營ましめる上に、多くの至福をもたらさんためであつて、第二義のものである。人道主義に立脚しない教育は、畢竟、人間のための教育ではあり得ない。

教育と宗教の離れられざる關係はこゝにある。しかも、人類の歴史は、過去に於て、

その社會より繼承せる、幾多の矛盾と惡德に汚されて來てゐる。良心が、全くそれ等に打ち勝つには、恐らく、永久に戰はなければならぬであらう、この見地からするも、今日の文化に對する批評は自由としても、一朝にしてなされたものでないことを承認しなくてはならない。そこには幾多の思想上の鬪爭と幾多の犧牲とが拂はれてゐる。そして、もし、昨日の生活より、今日の生活に於て、精神上に物質上に優れたるところありとしたら、卽ちその賜であり、理性の勝利であることを認めなくてはならない。

時代によつて、表面的の建築や風習や、流行は、いろ〳〵に變つてゐても、人間が、人生を愛したといふこと、卽ち內面的の感情や本能については、少しの變りもなく、相通ずるものがあつたといへる。

二

それ故に、吾人は、人生を肯定するのである。また、今日を忍び、明日に希望をつなぐこともできるのだ。親達は、誰しも、自分等の力でなし得なかつたことを、子孫

に持つて實現しようと思はないものはないだろう。また現代に於て、人類が、望んで達しなかつた理想は、それを次の時代の青年の手によつてなし遂げたいと希はざるはないだろう。かくのごとく、この間の情理を一にするのである。これを見ても、教育の精神は、かふした献身的なところにある。卽ち、信仰であり、純情そのものゝあらはれであると信ぜられる。

以上の理由からして、私達は、常に、教育を卑近な、もしくは功利的なものに解したくない。さう思ふ位であるから、もとより强權に隷屬して、一黨、一派の政策や手段となさんとする者に對しては、默止することはできなく、極力これに反對し、抗議せざるを得ないのだ。しかも、今日の教育意識をなすものは、大抵このやうなものではないか。

小學校に於ける、六年間の義務教育に於て、意識的に、機械的に、强制的に、人間が造られると信ずるものは、學校を兵營と同じく考へてゐるものである。もし、政治的に課せられたるイデオロギーにて、容易に兒童が改造されるものなら、かのマルクス

主義者のやうに、飜譯的經濟學理論を原則として、無產階級の兒童等は、科學的に、階級的に教育されるにちがいない。この場合、教育といふものは、機械の製造のやうなものであり、まだ組合組織の改良をなすのと、少しの變りのないものである。

三

かりに、かくのごときことが、可能としても、教育されたる奇形な兒童等は、幸福といふことができるであろうか。我等がいふ、兒童教育は、人間を對象に置く人間の利用でなくして、眞の人間を造ることを言ふのである。それがためには、教育は政治によつて指導さるべき性質のものでない。今日の教育を正しからしめんためには、何よりも、教育を强權から解放されなくてはならぬ。そして、眞に兒童を愛し、よく社會を認識し、正義の何たるかを知る者の手によつて、なされなければならぬのである。

所詮、支配階級は、當面の社會のことについてしか考へていない。彼等の急務とするところ、若しくは念慮とするところは、常に、その機構の缺陷を見出した時にある

それを補はんがために教育を利用する。そして、教育は、さうする場合の機關であり、教育の力は、かうしたことにあると信じてゐる。彼等は、曾て、彼等のなし來つたことが、間違つてゐたか否かについては、反省したことがない。恐らく、そのなかには、根本的に改めなければならぬものもあつたであろう。

しかし、いつしか推進し來たれる墮力によつて、たとへば、中等學校制度の如き、今日は、何うすることもできなく、無慈悲にも、多くの青年を制度のために犧牲にしつゝあるのである。

青年には、青年としての意志があり、未來があり、希望があり、從つて新しい生活があるべき筈だ。しかるに、現代の教育では、それを認めてゐない。よろしく檢討して、自然なるものは、發育、成長せしめるだけの理解と、親切がなければならぬ。たゞ、彼等は、自由を束縛することを規律とし、それを教育と考へてゐる。

かくのごとくして、眞の教育は、教育意識から解放されなければ、なされるものでないことを知るであらう。まことに、教育機關は國家が兒童を愛し、人間を造らんた

めの善良な施設でなければならぬ。

四

思ふに、現代の青年が、精神的に不健全なるもの多き所以のものは、この方面の情操開發を缺き、常に、仰壓されたる結果、反省、批判の能力なきに原因するものではなかろうか。眞に人間を教育することは、その人の持つすべてを生かすことである。かくして、畢竟その人でなければ表現されない特色を發見し、いよ〳〵發揮せしむるに至るのだ。こゝに、はじめて各方面に、卓越した人材は輩出する、しかるに、個性を無視し、人間を機械視して平然たるところに、なんで、多趣、多彩な、人間を產出することができよう。

人間の力をもつて、人間を意のごとく改造し得ると考へるのは、自然に對する、冒瀆といふべきである。たゞ、自然の與へたるものを防衛し、援助し、識別し、成長せしめるために、教育の任務を重しとする。環境のために、變態となる者も、一度は、

良心を持つてゐた筈だ。この意味からして、すべての人間を、善であるといふことができる。この觀念を基礎として、教育は施されなくてはならぬ。

獨り、教育家たらずとも、人生を愛するものは、この慈悲の觀念を有するものである。このやさしみを持たないものは、教育家であり得ない。また「自由が、創造する」と信ずる、藝術家ではあり得ないだらう。

マルクス主義者は、人間と人間の關係を階級的に區分する。それによつて、善惡を分つのだ。卽ち、彼等は、經濟のみが、すべての根底をなすと信ずる見解のいたすところに他ならない。しかし、制度や、組織より生ずる、善や惡はあつても、貧富によつて、人間を善惡に分つことはできない。嚴密に言へば、正とか、善とか惡とかいふことは、概念的にきめらるべきものでもなく、現實の個々の關係と、事實に卽して、批判さるべきものなのである。この點からしても、元來の概念的教育には、弊害があつたといへるのである。

純眞な兒童等を功利的見地から指導することも、偏狹なる社會主義的意識によつて、

闘士に養成することも、共に堪へ難き強壓である。

すべて、兒童の自由と人格とを無視する意識的教育は、今後に於て、清算されなければならぬ。なぜなれば、その中に不純の毒素を含むからである。これに代るべき、新しい自由主義の教育は、先づ、これ等の中から、兒童の解放を叫ばなければならぬ。

重て言ふ。私は、兒童教育は、人道主義的精神の徹底にありと。そして、このことは、獨り、犧牲的精神ある教育家にのみ期待さるべきことである。

國民精神について

國民精神を批評することは、その傳統的獨自の文化について研究することである。これを廣汎にすれば、民族であり、國民であるけれど、狹い意味に言へば、鄕土的といふことに他ならないのである。

故に、鄕土藝術について、その發生を考へることは、卽ち、藝術の特種性を述べることであり、やがてこれが國民精神の前提となるべきものである。

今日のやうに、交通機關が發達してしまつては、次第に他國といふ觀念もうすくなつたのであるが、その昔、山を一つ越すにも容易でなかつた時代にあつては、自分の住む土地と生活とは、切り離すことのできない、宿命的な關係があつたのである。その地方、地方、もしくは、國々にて造られた人形や、壺の如き手藝品を見ても、雜多であるが各の地方的特色を持ち、異つた感情を傳へてゐる。たとへば、俗謠のやうなも

のにしても、たとへ歌はれたる文句には、同じものがあつても、その言葉の訛や、節や、調子などには、全くその土地と離して考へることができない特異なものがある。これは、直に、その地方人の生活を表現するものとして、かぎりない懐かしさを他國人にも抱かしめたものだ。山國の町に、うたはれたものと、海港に近いところのものとは、自然風俗も異なる故に、物の見方、感じ方の上にも、線の太い細い、相違がある。

これを一様に言つてしまへば、東西、喜怒哀樂を一つにする譯だが、もつと内面的に仔細に觀察するに從つて、人間の生活程、刹那的であり、また變化に富んだものはない。すべて、内在しつゝある美の意識も正義感も、概念化され、抽象化されたものでなくして、かうして、多種多様の間に、感得さるゝものだといふことも知らなければならない。

藝術は、その人の環境から、自然に發生したるものが多い。汽車がなく、汽船がなかつた時代には、地方人の生活は、特種的であつた。なぜなら、運輸が困難だつたから、生産物や、製作品の交換といふことも自由でなかつたにちがひない。このことは、

その郷土的な傳統をいつまでも保守されたことになる。獨自的な、極めて特色のある文化が、地方地方に見られるのはこれがためだ。そこで、未開は、未開ながらに詩を持つてゐたといふことが分る。

一個の實用品が、同時に、持異な藝術であつたことは、自然的の製作であつたがためだ。何等そこに模倣なく、不純の技巧に汚されないからであつて、全く生活そのものに卽した點にある。こゝに、その個性的な藝術の强味が感ぜられる。

しかるに、なぜ過去に詩があつて、いまはないのか。詩といはれたるものは、しかし本質的な存在ではなかつたのか。もし、詩が、本質的なものでないとすれば、地方的感情、もしくはこれに類する國民精神と呼ばれるものも、また、本質的のものではなからうか。この疑問は、當然起らなければならぬ。

思ふに、地方的感情は、地方的生活が、保持された間にかぎつてゐた。それは、眞實なものであり、比較を絶した程美しかつたものにちがひない。しかし、封建制度が、一たび破れて、中央集權的となり、地方の關門が撤廢されて、交通が自由となり、從

つて、經濟的にも統一されたことは、やがて、地方的といふ意味をなくしてしまつたのである、加ふるに、すべてを商品化した資本主義は、地方の生産品の上にも、他律的な、加工となさずには置かなかつた。模倣、僞造、打裏等のものが、益々現はれるに至つて、いよ〳〵鄕土的の特色を保持するものが少なくなつて行つたのである。

一鄕土に於ける文化の變遷は、同じ理を國内の文化にも見ることができる。曾ては、支那、朝鮮、日本の陶器について見るも、それ〴〵に顯著な國民性の現はれがあつた。しかるに東西物資の交換、思想の移入、科學的施設の共同、かくして、外面的の生活の上には、東西あまりに著しき差異を見出さなくなつたのは事實である。マルクス主義に從へば、すべての精神文化は、たとへば、道德も、藝術も、畢竟するに、經濟的基礎に立てる上層建築に過ぎないと。故に經濟關係によつて、形態を變ずる。この故に、經濟的、思想的インターナショナルの運動は、やがて國家的な特種的觀念から離れて、統一的階級思想へ行くことを必然とするといふのである。

要するに、この問題は、土地とその人々との生活關係が、果して、いかなる程度ま

で、宿命的のものであるか否やによつて、解決さるゝやうに考へられる。

北方、寒冷の地に生育する植物は、氣候や地質によつて、それ自からの姿態を有する。葉にも、花にも、南方には決して見られない異色がある。この植物の生命も存在價値もまたこゝにある譯である。また、動物について見ても、場處によつて性癖を異にしてゐる。こゝに、その動物の生命がある。鶯といふ鳥は、北方の寒い地にあつてこそ、毛色も紅く、よく囀るけれど、暖かな南方に持つて來ては、毛色の紅は失せてしまつて、全く粗朴性は見られなくなつてしまふ。

適當の準備と施設があれば、其等の動植物の移住は可能であり、また時に改良をさへ加へられるけれど、こうした二義的のものに、既に本來の特色を見出すことは不可能といへるのである。

これに比すれば、人間の生活や、文化は、より粗雜であり、さらに性癖に富み、個性的であると言はなければならない。今日のごとく、商品化されたればこそ、藝術は、經濟的條件のもとに製作されるけれど、そこには藝術の形態のみを存して、生命とす

る詩も、感激も、失つてゐることを知らなくてはならぬ。眞の藝術は詩である、感激である。物質的條件はいついかなる時代にあつても、製作者の生活の上に必要であつたけれど、詩や、感激は、發生に、かゝる條件を伴はなかつたであらう。むしろ、藝術には、彼等と圍繞する自然と關係するところが多かつたのである。

地方に於ける文化は、隣人共同によつて築かれたのである。妄りに移植さるべきものでなく、また他人によつて改良されるものでない、それ自から伸展する氣稟を有してゐた。

しかるに、功利主義は、淺薄なる思想から、抂ぐべからざる個性の上にも、改良を加へようとした。東西文明の交錯といふごとき、畢竟、空虛な美名にしか過ぎないのである。

いづれの時代にあつても、學徒は、眞理を眺めて、遠くに憧かれてゐた。また美を愛するものにとつても其の點に變りがない。故國となつて、世界の諸處に悠遊し、また、研究するを例とする。

しかし、彼等は、智識より得たるもの、卽ち抽象的な眞理や、概念的な哲學によつて、果して滿足することができたであらうか。所詮、吾人は、理智的啓蒙から、感情的な理解に入らなければ滿足はできないのでなからうか。卽ち、心の故郷に歸らなければ、慰安を見出されないのでなからうか。忘れてゐた、鄕土を二たび顧みずにはゐられなくなる。恰かも候鳥が、產地を指して歸るやうに、彼等も、故郷を思はずにはゐられなかつた。文藝上に於けるロマンチシズムの運動は、理想の影を追ひ新奇を探ねて止まないものが、最後に、心の故郷へ歸るを常とする。心の故郷こそは、その人の部落であり、祖國であり、さらに廣汎に言ふ時に、東方的とし、また民族的とも言へるのでなからうか。互に、相呼び、相答へるところに、理智からでなく、感情に於て許し合ふものがある。そしてより地方的となるに從つて濃かになるのが當然の理である。相互扶助の愛は、共同の文化と生活を營む者の間に於てのみ感ぜられる現象であつた。

北方の人間が、概して、陰欝であり、瞑想的であるに反して、南方の人間が、明る

く、晴れやかであり、從つて行動的なのも本質上爭ふことができない。これを藝術について見るも、北方の畫家には、主義を異にし、流派を異にしても、たとへばリヒターとゴッホに共通ずるものを見出すことができる。これに同じく、南方の畫家、シャヴンヌとセザンヌには、どこか相通ずるところがあるのも偶然ではないのである。

なぜ、獨り偶然とばかり言ふことができないか。思ふに、それ等個性ある藝術家は、自己の鄕土のみが有する。自然美と、人間愛とを眞になつかしむがためである。太陽の光、海の色、一本、一草にも、故鄕のものには、特別の愛着を感じたがために、他ならない。何人か、過去に於て、自分と故鄕とを切り離して、自からの生活を考へることができるであらうか。自己と故鄕には、血脈の相通ずるものがある。

要するに、個々の生活は、抽象的理論からの成果でない。また成長の過程にある科學によつて。生活全部を說明することは到底不可能である。かの唯物史觀の眞理の如きは、一種の科學的方法によつて、人間社會の歷史を證明し得るといふことにしか過ぎない。しかるに人間は、機械でない。また靜物でない。各の性癖があり、自我があ

り、意欲を有してゐる。これ實に、物理學的法則が、人間社會の將來に對する豫則とはなり得ない所以であらう。

しからば、何が我々の生活を決定し得るか。思ふに自からの認識に待つより他に途がないのである。道德も、藝術も、すべての精神文化は、自からを深く認識するに始まるからだ。そして、さらに、共通の欲求を將來に於ける理想とするが故に、こゝに燦然たる國民的文化が建設されたがためだ。國民精神は、何等、科學と抵觸する筈のものでない。むしろ平行すべき關係にあるが、やゝもすれば、外來思想の强壓に怖れて、反動的となり、迷信に陷り易い、かくのごときは、自己省察と、美と善に對する認識の不足に依るからである。

要は、國民精神の特質は、抽象的、理智的世界觀の主張に對して、獨自的な、道德的感情的世界觀の確立を主張することになる。

學校家庭社會の關係的現狀

一

兒童の教化は、學校、家庭、社會の三者よりする。この三者は、有機的關係を有する。故に、理想をいへば、常に、一定したる指標の下に、協力して、その教化の任に當つてこそ、成果は遂げられるのだ。

しかるに、現在にあつては、一定の指標を有すると言へない。どこへ兒童を導くかすら思ひ思ひだ。社會が、統制の力を缺いてゐるともいへる。成程、政治的には、漠とした方向が、その時々によつて定められる。しかしそれ等は、いかなる認識の上に立ち、どれ程までの確信あるかは疑はしい、たとへば、學校に於ては、理論的の立場より、正しいと思ふところに、兒童を導かんとする。心理學、教育學、倫理學が、殆んど、劃一的に、兒童等を對象とすることによつて、一定の眞と思ふところに從つて、理性へ導かんとする。けだし、これは、いまのところそれ以上に出ることは出來なか

らう。

しかし、兒童等の生活は、決して同じとはいへない。また、上層、中層、下層といふ風に、概括的に、家庭の生活程度を分けて、これを基準として、それ等の性行を批判し、研究せんとしても、恐らく、眞を得ることは困難であらう。事實、生活層がさうはつきりと分けられるものでなく、また、兒童の性格が、獨り環境の所產であるとはいへないからだ。先天的の遺傳に依るところも多いからである。もし、これ等の兒童を合理的に教化せんとするには、學校に、全く、兒童を有せしめなければならぬ。そして、各々の性格に從つて、特種的の教育が施されてこそ、はじめて、理論的の教化は、なし遂げられるのである。それにしては、今日の學校より、もつと設備を完全にし、諸般の事務に停滯なきを期さなければならぬ。しかし、かくのごとき、科學的教育は現在に於ても、また將來に於ても、望むことはできないのだ。獨り、經濟の上ばかりでなく、かくのごとき慈愛に充ちた、献身的な教育家を、そう多く見出すことが困難なるに原因する。

故に、いまのところ、學校に於ける、理論的教育は、一端たるにしかすぎない。これを補ふものは、家庭、社會、兩者の教化でなければならぬであらう。

この最も、必要的な關係にある、多くの家庭について見るに、果して、學校との間にいかなる共關的なるものがあり、協力的なものがあると考へ得られるであらうか。このことは、家庭の責任ばかりともいへない。この頃に至つて、やうやく、教育は、地方的事情を考慮にいれてなされなければならぬことを、當事者は悟つたのであるが、つい最近まで、農村も都會も、北國も南國も、同一の教科書により、同一の教育方針によつて、機械的に教育されてゐたのだ。

だから、今日まで、南の國に教鞭を執つてゐた者が、明日は、北の國に赴任して、何等地理、人情、風俗等を理解せずに、その地方の兒童等に接することを不思議としなかつた。ちやうど、政變によつて、地方官の交迭が容易にせられ、既定の方針に從つて、機械的に、人民に强制を布くと異ならないのである。政治的機構については知らないが、理解と同情に立ちて、薫陶する教育にあつて、かくのごとき狀態は、當を

得たるものと言へるだらうか。

思ふに、教育すらが、これまでは、一種の强制のごとく考へられてゐたのだ。そして、ある點まで、軍隊に入ることによつて、兵士が造られるやうに、學校に、はいりさへすれば、教育がなし遂げられると思つてゐたのに、原因する。

二

學校の教育方針が、今日、果して、どれ程まで各家庭に於て理解されてゐるであらうか。もつとも、學科の成績によつて、兒童の優劣を定めんとする傾向の學校にあるかぎり、個性についても、性情についても、忘却され勝であり、偉くなるには、勉强しなければならぬといふ考へだけが、家庭にもあるのは、當然のことだ。

精神を忘れて、形骸に動く弊のあることは學校、家庭、兩者とも掩ふことはできない。しかし、これぱかりだらうか。卽ち今日の教育は、農村、都會、といふやうな、特種的の事情を忽諸にしてゐるばかりでなく、さらに、根本的に、何を教育するか、

何のために、兒童等を教育せざるべからざるかといふことが、極めて、漠としてゐるところに、最大の缺陷が見出されるのである。

本當の人間を造るのにあるか。それとも、現代に役立つ人間を造るのにあるか。社會への調和か。社會を改善せんとする目的のためにか。さうした、確信が、今日の教育にないといふことである。これがために、學校の教育が、理論的にといふ意味も、極めて、根據は薄弱なのである。そして、教員、各の教育に對する疑ひを持ち、信念を異にするかぎりは、學校に於てする、一定の方針を望むことはできない。

況んや、日常の生活に營々たる、多くの家庭に於て、果して、どの點まで兒童に關心を持ち、學校との協力をはからなければならぬと信ずるだらうか。

「早く、一人前になつてほしい」

たゞ、かう思ふのが、今日、家庭に於ける親達の心情なのである。一人前といふことは、立派な人格の持主になるとか、次の時代を構成するに、眞に役立つ分子になるとかといふよりは、早く、經濟的に、自立されるやうになり、若し、それが長男であ

れば、一家のために役立つてもらいたいといふ意志に他ならないのだ。

家族制度の存續するかぎり、かくのごとき考への存するのは、極めて自然であらうそして、この兩親の抱く思想を副ち責ることはできない。こゝに、學校との間の矛盾がある。少なくも、學校教育は、科學的眞に就かうとする。そして、各家庭の生活狀態を考の中にいれる餘裕を持たない、しかし、家庭に於ける兒童は、全く、各家庭の感情の中に沒入する。いかに、兒童等にとつて、學校と家庭とは、別々な世界であらうか。

思ふに、學問と生活の分離は、こゝから始まると言つていゝ。學校は、讀書、もしくは地理、歷史、算術を教へるところであり、それが、よく出來ることは、優秀な人間になることであると思つてゐる。そして、そのために家に歸つて、兒童は、學課の復習をする。それで、いゝ譯なのであるが、家庭の事情によつては、それができない。しかも、兩親は、それ以外のことを、たえず自分達に向つて望んでゐるやうだ。彼等の小さなる頭は、混亂するといふよりは、いかなる人間になることを、先生や、兩親

は望んでゐるのかに、迷つてしまふ。一方は、よく學問の出來る人間になれといふし、一方は、みんなのために、やさしい、役立つ人間になつてくれいと望む。そして、この兩者の言ふところは、全く別種なものだといふやうな考へを頭の中に持つのである。

ブルジョア階級の家庭、智識階級の家庭、勞働階級の家庭、恐らく、兒童等に對して望むところは、同じでないであらう、かくのごとくして、新しい次の時代の兒童等は、いまのうちから考へが、別個であり、分裂し、甚しく、調和が缺けてゐるのだ。

三

これ等の分裂に階調を與へ、統一をはかり、方針を決定するものこそ、實に、社會教化の任務であつて、卽ち、これによつて、智識と、感情、學術と人格の並行を、さらに、將來に對する認識と、希望を與へなければならぬのである、

この社會教化のうちに於て、最も、重要の立場にあり、また力强いものは、中でも、藝術でなければならぬ。それについては、現時の兒童文藝は、檢討せなければならぬ

であらう。

ある意味に於て、この種の文藝は、兒童のためばかりでない。兒童等を中心として描かれたる大人の文藝でもあるのだ。眞の文藝家のみが、個々の兒童の生活について、理解し、同情をすると言ひ得られる。

家なく、親なく、路頭に彷徨しなければならぬもの、病氣のために、自然の惠慈に浴せざるもの、貧困のために幼時より、働かなければならぬもの、また、自から抱く心理の理解されざるために、虐げられたるもの、等々、要するに、その環境の異なるに從つて、千差萬別の生活がある。そして、どの生活にも、深い人生の機微は見られる譯だ。强制によつて、兒童の生活は、かくあるべきであるとしても、實際に於ては行はれないことである。こゝに於て、兒童のための代辯となり、また、兒童と社會との交渉の役目をするものに、この種の文藝がなければならぬのである。兒童の代辯になりて兒童を社會に理解せしむると同時に、常に、社會といふものは、どういふものであるかをいろ〳〵に分り易く描寫して、また兒童等に、これを認識せしめなければ

ならないのである。兒童文藝家が、自から、社會に暗くてはならない點はこゝにある。また兒童に阿つてならない點もこゝにある。そればかりでない。社會の全的意志が、兒童等に要求しつゝあるところは何んであるかを、藝術を通して、理解せしめなければならないのだ。かくしてこそ、眞に、兒童等をして、勇氣づけ、希望と光明とを持たしむるものであつて、はじめて、眞の兒童文藝が、存在の意義があるのである。

今日の兒童文藝は、商品雜誌に隷屬する理由から、全く、これ等の意義について忘れ勝ちである。兒童教化の唯一の機關たる、これ等の讀物や、映畫が、營利のために、放任されつゝあることは、强制ある社會の事實として、果して、當を得つゝあるものか、疑ひを狹まずにゐられない。兒童を、すべからく國家のものとし、もしくは、社會のものとしなければならぬといふ意志に對しても反してゐる譯である。

彼等、營利業者は、それが、三千、四千の讀者を對象とした時代にあつては、尙ほ企業家の見地から、藝術に對して、奉仕する識意があつたやうだ。しかるに、現今のごとき、全く金融資本時代にあつては、藝術に對する良心も、讀者を顧慮しての理想

主義を、また作家の意志に對する尊重も顧みられないのである。要は、大最生産に大衆の獲得、競爭雜誌の勦滅にしかすぎない。

されば、舊文化を擁護して、支配階級の後援を得ることが肝要なのだ。このことは、いかに新時代を造らんとする兒童等にとつて、間接の禍をなしつゝあることか。何となれば、舊文化、舊道德は、改善されざるかぎり、人間を保守的ならしむる以外に役立たないからだ、それ等の文化は、すでに、過去に於て成果を擧げて來た。それに宿れる殉情を獻身的精神には、大に學ばなければならぬものがあるに相異ないが、社會は、常に固定せずして、流動する。文化の進行を認めずにはゐられないのである。

世界の情勢は、思潮は、いかに推移しつゝあるか。それにも時代の繼承者は、順應しなければならぬ。恐らく、十年、二十年後の社會は、今いかに、保守主義者が、反動的に出ようと、自由を慕つて、赴くところに行くであらう。

合理化されたる、新生の社會こそ、やがて萬人の力によつて建設されなければならぬものだ、其の新社會の形態とはいかなるものか、これこそ、學校も、家庭も、社會

も、唯一の指標として、協力して、兒童を教化すべき所以ではあるまいか。人間は、到底、機械ではあり得ない。命令や、强壓によつて、指導されるものではないのである。道德の基礎に立つて、信念を行動化することによつてのみ目的は達せられる。

兒童等に對して、教育を施すもの、單に、技術や、智識のみで足れりとしないのもこれがためである。人間としての操守、自負、正直、等々、情意の教育に、最も多く費せなければならぬと思ふのは、畢竟、機械化するにあらずして、眞の人間を造らんと欲するからに他ならない。

先づ、將來構成されたりとする社會について考へ見よ。いかに、今日より文明に、合理化されたりとしても、すべてが、理智的で、冷たく、人間と人間の交渉のごときも、實質以外に出づることがなかつたら、人生は、索漠たるものではなからうか。

默會があり、寛容があり、憧憬的なるところに、多分の人間味が存するのである。しかも、生活上の多くの矛盾を統一して、さらに、平和と慈味と光輝をもたらすために、人格の教養が必要なのであつた。

現代は、學校、家庭、社會、共に、この種の人間を造るとせず、當面の機械化に及々としてゐる。そして。唯一の文藝のごときも、全く墮落し、反動化しつゝある。やがて、今日の過誤と不親切は、次の時代に、いかなる結果となつて反映されんとするであらうか。

愛のあらはれ

共に風雨に惠まれて、太陽の加護のうちに生きる一切の生物には、互に相愛し合ふといふ心の宿るものです。有名な人々によつて、それがなされた時には、いつまでもその行爲は記されてゐるが、心なしに、また何人によつてといふことなく、なされたいつくしみの行爲こそ、より一層情の深いものと思はれます。

あの雪の深い、北國で、どうして、若木が育つか。人間の助けなしに成育するものでない。近く、雪の來る前になると、頰被りをした男共が、桑圃などで、一本、一本、木の頭を藁で卷いたり、また、枝を幹に注意深く釣つてゐるのを見るでありませう。『來年まで、雪の下にゐるのだが、どうか折れずにゐてくれよ』と、いふやさしい息が、無心の木の頭にかゝつてゐます。卽ち、冬の恐怖を知る人間の同情が、おのぞと、草木の上にうつされるのでした。私は、北國人が、若木に施す、雪圃に於ける程、や

さしい心の宿りを他に多く知りません。

× × ×

ある日、女學校の傍を歩くと、コンクリートの塀が造られてゐました。そして、一本の年とつた櫻の木のところで、仕事が中止してゐました。以前よりも高く築いた塀が、外側へ斜に伸びた木の幹に、上方を遮られて、工事が尋常にいかなかつたからです。見ると、木の根本の方は、白くなつて、可なり中まで斧で切られてゐました。しかし、それも何うしたのか、仕掛けたまゝやめてゐます。

『邪魔だから、木を伐らうとしたのだな』

私は、不幸な木を考へずにはゐられませんでした。それから、四五日經つて、二たび、そこを通ると、木は伐られずに立つてゐて、コンクリートの塀は、幹の周圍に尙餘裕を二三寸環狀に殘して、工事は、ずつと彼方まで進行されてゐました。この時、しみ〴〵と人情の美しさを覺えたのであります。

×　×　×

私は、盆栽を見ることが好きです。それで、折に求めるやうなことがありますが、その趣味を解する程の人ならば、木と鉢の調和を氣にする位のことを知らないものはありますまい。いゝ木に、いゝ鉢を見付けた時は、すぐにも、その木をその鉢に植ゑたくなるものです。

それは、寒い時分のことでした。

『これを、この鉢に移してもらひたいものだ』と、言つて、私は頼みました。

『いま動かすのは、可哀さうです。冬眠にはいつて、休んでゐますから、もう少し經つてからになさいまし』と、その盆栽屋の主人は、自分の子供でも扱ふやうに、慈愛にみちた眼で、木を見ながら答へました。

×　×　×

これ等は、その折々、しかも、ことさらゝしくなく、人間の草木に對する、愛のあらはれではありませんか。私は、かうした、自然の行爲の中に、かぎりなき、飾らざる至純な、愛の流露を感ずるものです。